



Title	日本語の漢語の文法的特異性とその中国語への影響 : 「設計」の近現代語史
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2022, 62, p. 127-172
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87423
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語の漢語の文法的特異性とその中国語への影響

——「設計」の近現代語史——

田野村 忠 温

1 はじめに

日本語の複合的な漢語——複数のいわゆる字音形態素から成る語——には、19世紀末までの中国語を基準として考えれば、字面上ないし表現の型においてそれと一致する中国語の表現に比べて文法上特異と言うべきものが多い。

19世紀末までの中国語というのは、日本語の影響を受け始める前の中国語ということである。したがって、上のように述べることは、20世紀以後の中国語にはそうした特異性が一定程度に見られるということの意味する。そして、それは少なくとも部分的には日本語の影響によって生じたものであると推定される。

日本語の漢語に関しては多年にわたる研究の蓄積がある。日中両語の表現を対比的に見る考察もあれば、もっぱら日本語の漢語を見る考察もある。前者の種類の研究は、近年では多く近代日中語彙交流の観点から行われている。主要な著作の出版年順で言えば沈国威、荒川清秀、陳力衛、朱京偉などの各氏が現代におけるその代表的な研究者であり、特に重要な成果には、当該領域の現代的な基盤を確立した沈（1994）に始まり、沈（2010）、沈編著（2019）、荒川（1997, 2018）、陳（2001, 2019a, 2019b）、朱（2003, 2020）などがある。

日本語の漢語の特異性を論じるには、当然その判断の基準となる中国語も視野に入れる必要がある。この小論は、日中語彙交流研究の問題意識に文法の観点を組み合わせて漢語の特異性について考え、それに関わる一事例である「設計」という語の日中両語にまたがる歴史を探ってみようとするものである。

なお、論題で用いた「日本語の漢語」という言い回しを本文中でも用いるが、それはただ「漢語」と言うのと同じことである。日本語研究の文脈において漢語は日本語の語種の1つであり、「日本語の」という修飾は本来不要である。しかし、中国語の表現との対比における議論であることを明示するために随時そのような修飾を加える。それによって、単に「漢語」と書いて和語や外来語との対比だという誤解を招くことを防ぐこともできる。

以後、漢字は一部の引用の文脈を除き原則として現代日本の字体による。

2 動詞-名詞型の2字漢語の2つの文法的特異性

ここでは日本語の複合漢語のうち「読書」「飲酒」のような動詞-名詞型の2字漢語を主たる対象とし、その注目すべき2つの文法的な特徴について考える。

ただし、「動詞-名詞型」という言い回しにおける「動詞」「名詞」は便宜上の表現であり、厳密には正しくない。「書」は名詞としても使われるが、「読」「飲」「酒」は自立性を持たない造語要素でしかないからである。しかし、記述の簡潔のために、各字音形態素の意味特性あるいは中国語における品詞を根拠としてそれらを「動詞」「名詞」と呼ぶ。

2.1 一語化

まずあらためて確認すべき日本語の2字漢語の大きな特徴は、それが動詞-名詞型であるかどうかを問わず、疑問の余地なく1つの語だということである。

「読書」は、本来「書を読む」と返読して初めて日本語の文法にかなう形になる中国語の動詞句「読+書」——動詞と目的語の組合せ——であるが、そのような返読をしないでそのままドクショと字音で読み下して1つの名詞に仕立てた直読語（拙論（2020））である。¹ そのような見地からすれば、「読書」もまた和製漢語の1つである。1つの名詞であるから、「読」と「書」のあいだに別の要素をはさむことはできないし、固有の語アクセントを有している。と言うより、そのような説明を加えるまでもなく、「読」はそもそも語ではないから、「読書」は当然2語ではあり得ない。²

¹ 「読書」が漢文の表現を基礎として作られた語であることは自明であろうが、実際次のような記述にもそれを窺うことができる。

読^レ書^ヲ法

学問ハ書ヲ読ムヨリ始マル。読書ノ法ニツアリ。一ツニハ華音ノ読、二ツニハ倭語ノ読ナリ。

（太宰春台『倭読要領』巻中、1728（享保13）年）

見出しでは「読書法」の「読書」を「読^レ書^ヲ」と返読しているが、本文の「読書ノ法」の「読書」はドクショと読まれる語であろう。前者から訓読の手間を省いて一語化した結果が後者だと考えることができる。なお、引用中の「華音ノ読」と「倭語ノ読」は音読み、訓読みということではなく、前者は漢文をそのままの語順で中国語の発音によって読むこと、後者は訓読を指す。

² 念のために注意しておけば、「読書」のような語が動詞と呼ばれることがあるが、実際には名詞であり、それが「～する」などの形に複合した結果が動詞だと言えるに過ぎない。「する」の類と共起していなくとも、例えば「夜12時まで読書。」のような表現における「読書」は「読書する」ないし「読書した」に相当する意味を表し、文型、格パターンも共通する。しかし、それは表現の省略と考えるべき現象であり、「読書」が日本語の品詞分類上動詞の範疇に属することを意味するわけではない。「3時まで昼寝。」における「昼寝」や「正午にスタート。」における「スタート」が動詞でないのと同じことである。もっぱら意味の面から考えれば「読書」が動詞のように感じられるとしても、そのような見方で適切な品詞分類に到達することはできない。日本語の動詞の概念は、一般に考えられている通り、その形態変化の

これに対して、中国語の「読書」が1語であるかどうかは日本語の「読書」のように明確ではない。中国語の文法ではある表現が語か句かということがしばしば問題となる通り、語の認定基準次第で、語であるという判断にもなれば、動詞句であるという判断にもなる。日本語では紛れもなく1つの語である「散歩」「努力」「結婚」などが中国語では「散散步」（ちょっと散歩する）「努一点力」（もう少し努力する）「結了婚」（結婚した）などと言えることを知って驚かない日本語話者はいないであろう。中国語でも「読書」「散歩」「努力」「結婚」を語と見ることができないわけではないにせよ、それらが語であるとしか考えられないのは日本語の2字漢語の特徴であり、漢語の起源である中国語を基準として見れば特異な事実である。

動詞-名詞型以外の語で言えば、中国語の「可能」は動詞を後接させて助動詞的な働きをする2字の連接であったが、明治期の日本人がそれをカノウという語として独立させ、形容動詞の語幹などとして使えるようにした——おそらくその背後には possible や potential などの語に翻訳を与える必要があるという事情があった——。しかも、当時の日本語にあっては、「成功する可能」や「非常に可能である」などの言い方もなされた——今ならそれぞれ「成功する可能性」「可能性が高い」などと言う——。そうした用法は日本語ではその後廃れたが、中国語に借用されて定着し、「成功的可能」「非常可能」などの表現が今も使われている。³（拙論（2017））

日本語の2字漢語は、接辞を要素として含むものなどを別とすれば、その多くが語彙における個別的な存在であるという事実も注意に値する。すなわち、生産性の低い過程による造語だということである。「読書」は一見、「読^{どく}」と「書^{しよ}」を規則的に組み合わせることができる“当たり前”の語のように見えるが、類似の語を探してもわずかししか見つからない。“～を読む”という意味を表す「読○」という形の語は「読書」以外にあまりない。「読本（する）」「読文」「読詩」「読信」などとは普通言わない。「読新聞」「読^ど文学作品」のような長い語はそもそも作ることができない。例外として指摘できるのは「読^ど経」や「読譜」などの少数の語にとどまる。また、“書（本）を～する”という意味を表す「○書」という形の語は「読書」以外にあまりない。「買書」「売書」「借書」「出書」などとは普通言わず、「購入書（する）」「出版書（する）」などとはそもそも言えない。「禁書」や図書館用語の「選書」などの例外はあるが、やはり数は少ない——「書」の意味の範囲を広げて考えれば「投書」のような語もそれ

特徴と不可分に結び付いている。

また、「読書する」のような複合動詞の研究で決まってサ変動詞という用語が使われるが、それも適切ではない。そのような研究で問題とされていることは「～いたす」「～なさる」「ご～になる」などの言い回しにも共通し、サ行変格活用動詞には限られないからである。ちなみに、それとは対照的に、「辞する」「属する」「感じる」などの1字漢語に基づく複合動詞の大半は現にサ変動詞の範囲内で論じられるべきものである——「辞いたす」「属なさる」「ご感になる」などとは言えない——（拙論（2001））。

³ 中国語では「可能」はさらに文副詞の類にも加えられ、「可能明天下雨」（あす雨が降るだろう、降るかも知れない）のような用法も生じた。

に加わる——。

これとは対照的に、中国語の「読書」にそのような制約はない。「読」はその行為の対象となり得るものを表すあらゆる名詞句を目的語とすることができ、「書」はそれを対象とするあらゆる行為を表す動詞の目的語になることができる。「読書と報紙」(本や新聞雑誌を読む)のように目的語を拡大したり、「読一本書」(1冊の本を読む)「読英文書」(英語の本を読む)のように2字のあいだに別の語句を加えたりすることもできる。「読一箇小時の書」(本を1時間読む)のような表現に至っては、直訳すれば“1時間の本を読む”であり、日本語の知識では考えられない言い回しである。

日本語の「読書」は辞書で多く「本を読むこと」という語釈を与えられているが、実際には本を読むことを一律に表すわけではない。例えば、娯楽のために小説を読むことは典型的な読書であるが、学生が教科書を読むことを「読書」とは通常言わない。他方、中国語の「読書」も、“書を読む” ことに加えて、「在大学読書」(大学で学んでいる)のように“学ぶ”などの意味も表す。この種の意味変化は、当の表現が一語化していることを確かめ得る決定的な証拠にはならない。意味変化は一語化したものに起きやすいとしても、慣用句の存在が示す通り、句的な表現にも同様に起きるからである。

中国語の「読書」を1語だと言おうにも、その根拠として挙げ得る事実はおそらく、それが同類の漢字接続のうちで相対的に高い頻度で使われるものの1つであることと、上記のような意味変化が見られることくらいしかない。

2.2 用法の再構築

日本語の漢語の注目すべきもう1つの文法的な特徴は、その用法が字義に基づいて予測されるところから往々にして若干ずれているという事実に関わる。特に動詞-名詞型の2字漢語にそれが多い。

「馬から落馬する」という古くから知られた重言的な言い回しがある。日本語話者がそのように言ってしまうことがあるのは、ラクバという語が本来「落+馬」という構成で“馬から落ちること”を表すという事実が意識されにくくなっている——すなわち、複合的な表現の分析性、透明性が半ば失われている——からであろう。「馬から落馬する」とだけ言えば重言の印象が強いにせよ、インターネットで確かめてみれば、「調教中の馬から落馬した」「ラッキーホープから落馬して負傷した」のような言い回しは広く使われている。そして重言の烙印を押されるべき表現であるとも筆者には感じられない。

上のことは、“馬から落ちること”を原義とする「落馬」が“～から落ちること”という未指定の要素「～」を含む意味を派生させ——ただし、その「～」は馬であるという条件が付くが——、「～が落馬する」だけでなく「～が～から落馬する」という文型、格パターン

でも使われるようになったということだと解釈することができる。動詞-名詞型の2字漢語の用法の再構築と言ってもよい。

周知の通り、日本語の動詞-名詞型の2字漢語にはそのような特異と言うべき意味の派生、それに基づく文型の拡張の現象が広範囲に見られる。「読書」「飲酒」のように動詞と名詞が意味上“～を～する”という関係にあるもので言えば、「親知らずを抜歯する」「金メダルを受賞する」「会費を集金する」「レストランを出店する」「母音を発音する」など、枚挙にいとまがない。それらは、例えば「抜歯」について言えば、“歯を抜くこと”から“～を抜くこと”という未指定の要素を含む意味を派生させ——ただし、その要素は「歯」であるものに限る——、「～が～を抜歯する」という文型を生み出したということだと考えることができる。「受賞」「集金」「出店」「発音」についても同様である。「抜歯」は「歯」という目的語を含んでいるが——便宜上そのように表現するが、問題なく「歯」を目的語だと言えるのは「抜歯」を中国語の動詞句に見立てるか、もしくは、それを「歯を抜く」のように訓読した形で考える場合のことである——、その「歯」に相当する別の名詞句を目的語に取る「～が～を抜歯する」という文型が作られている。これをかりに「文型の重複的な拡張」と呼ぶ。

論者の内省に基づく判断に依存した研究では決まって、「読書」などの語にはそのような拡張は起きないと論じられるが、インターネットで探せば、「1冊の本を読書して得られるもの」「様々なジャンルの本を読書する」「古典を読書することの意味」のような表現の例が容易に見出される。そしてそれらには特段の重言の印象もない。日本語はこの種の拡張に関して寛容である。

文型の重複的な拡張の事例と異なり、「大学を卒業する」という言い回しには重言的な要素はない。「卒業」は本来“業を終えること”を表しそれ自体で完結しているが、その業を積んだ場所を表す名詞句を新たに目的語として取る「～が～を卒業する」という文型を生み出している。「小説を執筆する」「食品を着色する」「材料を加熱する」などの表現もそれと同様である。以上のようなものを「文型の非重複的な拡張」と呼ぶ。重複的な拡張と非重複的な拡張の区別は、例えば「親知らずを抜歯する」においては「親知らず」が「歯」の一種、一例であり、したがって、抜かれるものが二重に表現された形になっているのに対し、「大学を卒業する」においては「大学」が「業」の一種ではなく、そのような二重性がないということにある。

語によっては用法の再構築に際して文型の重複的な拡張と非重複的な拡張の両方が見られる。例えば、「常在菌を殺菌する」という表現は“菌を殺すこと”を表す「殺菌」に基づく重複的な拡張の例であり、「布巾を殺菌する」という表現は非重複的な拡張の例である。同様に、「足跡を追跡する」は重複的な拡張の例であり、「逃亡者を追跡する」は非重複的な拡張

張の例である。⁴

文型の拡張の周辺には、一見それに似ているが、性質が異なるものもある。例えば、「健康に注意する」という言い回しは、「注意」、すなわち、“意を注ぐこと”の対象を加えた「～が～に注意する」という文型である。しかし、「～に意を注ぐ」とも言えることから分かるように、「～に」の付加は「注意する」と「意を注ぐ」に共通する現象であり、「注意」という語だけの問題ではない。同様に、「新聞に意見を投稿する」という言い回しは、“原稿を投じること”を表す「投稿」に基づく「～が～に～を投稿する」という文型であるが、そこでの拡張的な要素は「～を」だけである。「新聞に意見を投じる」とも言える通り、「～に」の付加は「投稿」という語に限ったことではない。以上のような例における「～に」は文型の拡張によると言うより、「注意」「投稿」が本来的に取り得る述語の要素と見るべきであろう。もっとも、「注意」には「人を注意する」「服装を注意する」のような言い回しもあるなど、語ごとに状況は複雑である。

動詞と名詞が意味上“～が～する”という関係にある2字漢語で言えば、「安土城が落城した」や「ランプが点灯する」は文型の重複的な拡張の例であり、「川が増水する」や「歯茎が出血する」は非重複的な拡張の例である。また、動詞と名詞が“～に～する”の関係にある2字漢語で言えば、「小学校に入学する」や「バスに乗車する」が重複的な拡張の例であり、「会社に就職する」や「日本に寄港する」が非重複的な拡張の例である。「馬から落馬する」は、動詞と名詞が“～から～する”という関係にある2字漢語における重複的な拡張の例である。⁵

中には文型の拡張の論理が2字漢語の字義から見えてこない事例もある。ここで日中両語における近現代の語史を探ってみる「設計」もそのような語の1つであり、「～が～を設計する」という文型はやはり非重複的な拡張の結果である。先回りして結論の要点を言えば、「設計」は、“計を設ける”、すなわち、“はかりごとをめぐらす”、“計画を立てる”などの意味から出発し、例えば橋梁建設の計画を立てることを「橋をかけることを設計する」あるいは「架橋を設計する」と表現するようになり、さらには、「橋」自体を目的語として「橋を設計する」とも言うようになった。現在一般に使われる「建物を設計する」や「機械を設計

⁴ 文型の重複的な拡張と非重複的な拡張の区別は常に明瞭であるわけではない。中にはいずれの種類の拡張の例であるかの判断に迷うものもある。例えば、「書籍を出版する」はどうであろうか。「版」と書籍の関係はどう考えるかによって結論は違ってくる。「版」が2度現れる「改訂版を出版する」はどうか。「出版」に限らず、語ごとの事情によって判断のむずかしい事例は少なくない。

⁵ ここで考えている種類の意味の派生、文型の拡張は一部の和語動詞にも見られる。「描く」を“絵をかく”と解してよいとすれば、「水彩画を描く」は重複的な拡張の例であり、「景色を描く」は非重複的な拡張の例である。「新芽が芽生える」は重複的な拡張、「チューリップが芽生える」や「友情が芽生える」は非重複的な拡張の例である。多数の漢語に観察される拡張とそうした和語動詞に見られる拡張の背後にある論理、感覚は共通であろう。

する」などの言い回しは、そうした用法の変遷の結果である。

なお、日本語の動詞-名詞型の2字漢語に広く観察される特異性には、以上において見てきたような種類の用法の再構築のほかに、コトを表す用法からモノを表す用法の派生、そして、前者から後者への移行の現象がある（拙論（2020, 2021）⁶）。例えば、中国語の「吐血」（血を吐く）という動詞句をトケツという語、名詞にし、「吐血する」などの形で“血を吐く”という行為や事態、すなわち、コトを表すとともに、「血」を主要部として再解釈することによって、「シャツの胸元が赤黒い吐血で汚れている」という表現におけるように“吐いた血”、すなわち、モノを表す用法を生じた。「化石」は本来“石に化す”というコトを表したと考えられるが、“（動植物が）化した石”というモノも表すようになり、今では後者が用法の中心となっている。⁷

2.3 中国語への影響

中国語に関する筆者の乏しい知識に頼った判断によれば、上述のような文型の拡張に相当する現象は本来の中国語にはなかったか、あったとしても稀であったと思われる。ところが、現代中国語には似た性質の表現が散見される。日本語と中国語とでは拠って立つ文法が異なるのであらゆる表現を単純に比較できるわけではないが、例えば、「懷疑別人」（他人を疑う）「着手工作」（仕事に着手する）「注意身体」（健康に注意する）「消毒手指」（指を消毒する）などの言い回しである。それらにおいては本来動詞-名詞型の動詞句であったものにさらに別の名詞句が続いた形になっている。それは、動詞句が一語化して目的語を取る他動詞に変化したということだと解釈することができる。「設計」もまた「設計大楼」（ビルを設計する）のように目的語を取ることができる。

王（1945）は「第六章 欧化的語法」において、“西洋の言語の1語が中国語に訳せば句になることがある”と論じ——animalが「動物」、truthが「真理」になるなどの事実が例として挙げられている——、翻訳の影響によって生じた“非常に特別な現象”の1つとして目下問題としている種類の表現に触れて次のように述べている。加点は原文の傍点を踏襲したものである。

就中文本身看來是不通的，若譯成西文卻是通的。例如：

⁶ 早く沈（1990）にこの問題に関連する考察がある。

⁷ 正確を期して付言すれば、2.2の標題にも使った「用法の再構築」——本来の中国語にはない用法の創出——という表現は理想的なものではない。中国語にはない2字の連接による漢語の場合にも共通の現象は見られ、その場合は字義通りの再構築とは言えないからである。しかし、そのような場合においても本来の中国語では考えられない用法を生み出しているわけであり、類推的な意味において再構築と言うことはできる。

動員民衆 上帝祝福你 蘇聯撤退^(ハリコフ) 日軍登陸北海

(中国語として見れば通らないが、西洋の言語に訳せば通る。例えば、

民衆を動員する 神が汝を祝福する ソ連はハリコフを撤退した 日本軍が北海⁸に上陸した)

王は注で「動員」を mobilize、「祝福」を bless、「撤退」を evacuate、「登陸」を land、disembark と説明している。「撤退」は動詞-動詞型であろうから性質が異なるが、「動員」「祝福」「登陸」は動詞-名詞型であり、それらが動詞として「民衆」「你」「北海」という目的語を従えている。それが英語の影響による現象であった可能性もないとは言えないが、「動員」と「祝福」の語は日本語に今もあり、「登陸」も過去にはあった。控えめに言っても、始めから日本語の影響の可能性を抜きにして語れる問題ではないであろう。王は、もう1つの“非常に特別な現象”として「国立学校的校長」「兒童看童話」(兒童が童話を読む)などの「詞複」(語の重複)を挙げているが、それらもまた「国立大学の学長」「兒童が童話を読む」という日本語の表現と文字の単位で対応している。

もっとも、日本語の影響という単純な見方ですべてに説明が付くわけではない。「担心結果」(結果を心配する)の「担心」、「抱怨不幸」(不幸を怨む)の「抱怨」、「揭秘真相」(真相を暴く)の「揭秘」のように日本語にはない——そして、おそらく過去の日本語にもなかった——語の例もある。また、「動員」は日本語と同じく目的語を取り得るが、「動員他們参加」(彼らに参加を働きかける)のような、日本語の「～が～を動員する」という文型には対応しない文型での用法が一般的になっている。⁹

中国では20世紀の終盤以来、「動賓式動詞帶賓語」(動詞-目的語型の動詞が目的語を取る)——ないし、短縮して「動賓帶賓」——の現象が注目され、盛んに論じられている。それは日本語の影響による変化なのか、西洋の言語の影響による変化なのか、それともまた、中国語の内発的な変化なのか。筆者に考察できる範囲を超えた複雑な問題であるが、それはおそらく単一の要因に帰することのできない複合的な事象である。時代により、語により、変化の原因が異なる可能性が高い。実際、論じられている事例には日本語にも英語にも共通する要素を見出せないものもある。しかし、複合的な事象のうちに、日本語からの語の借用の結果として表現の性質に変化が生じたという側面があることは確実である。

「設計」の語は、日本語の直接的な影響によって「動賓帶賓」の現象を生じた一例である。中国語において変化が生じた時期の状況を観察することによって、その影響の進行の様子を

⁸ 中国南部の地名。現在の広西チワン族自治区沿岸部の地方都市。

⁹ 中国語には日本語の重複的な文型の拡張に相当する例は少ないのではないと思われる。「出版」や「動員」はそれに該当する可能性があるが、本文に挙げた例の多くが非重複的な文型の拡張に相当する。

確かめることができる。¹⁰

なお、前節（2.2）の最後で触れた、コトを表す用法からモノを表す用法への派生、移行という日本語の漢語の特徴的な現象が中国語に与えた影響はおそらく相対的に小さい。「化石」の語は中国語にも借用されて定着したが、類例は少ないものと思われる。

3 「設計」に関する予備的考察

これより「設計」という語の歴史の考察に入る。「設計」の語史に関する既存の研究、記述は多くないが、いくつかある。本節ではそれらの内容の確認と検討を通じて筆者の見解の大略を明らかにし、次節における論述の基礎を準備する。

3.1 日本語の「設計」——惣郷・飛田編（1986）、『日本国語大辞典』第2版（2001）

明治期を中心とする日本の辞書類の調査に基づいて編まれた惣郷・飛田編（1986）は、「設計」の項目を次のように記述している。引用された辞書類の記述も有用な情報を含むので、項目全体を示す。

せつけい 設計

[和英大辞典・明 29] [Engin.] Design. Syn. MOKUROMI.

[高等国語読本字解・明 34] モクロミ。

[和仏大辞典・明 37] Plan, dessin.

[新式以呂波引節用辞典・明 38] たくむこと。

[熟語新辞典・明 40] こしらふるしくみのこと。

[英和対訳電気用語集・明 42] Design.

[新訳和英辞典・明 42] A plan (計画); a design. 〈中略〉此建築は誰の設計ですか。

Who¹¹ designed this building?

[類別索引書翰辞典・明 43] たくむこと。

[辞林・明 44] 或物をこしらへまうくるに就きての計画。つもり。もくろみ。

¹⁰ 脱稿間近の段階になって李（2019）の存在に気付いた。李は中国語の「動詞目的型他動詞」が目的語を取る現象が日本語の影響であると多数の語に基づいて論じている。日本語から中国語への文法的な影響に関する私見と本質的に同じ見解がすでに述べられていたことになる。併せて参照されたい。ただし、本文に述べた通り、中国語の当の現象をすべて日本語からの語彙の借用の結果と考えることができるわけではない。

¹¹ 惣郷・飛田編では Who が who と書かれているが、当該の井上^{じやうきやう}十吉編『新訳和英辞典』（1909（明治42）年）に基づいて訂正して引用した。

[模範英和辞典・明 44] Design・Plan・Plot¹²・Project・Scheme

[大辞典・明 45] 計画ヲ設ケ立テルコト。しくみヲ工風スルコト。もくろみ¹³ヲ立テルコト（オモニ建築土木ナドニ云フ語）。

[新式辞典・大 1] 或物をつくるについての計画。みつもり。

[美術辞典・大 3] (Design) 芸術作品の意匠を作ること、特に建築の意匠について多く用ひられる。〈下略〉

▷意味 明治時代の新語。英語 design の訳語。国木田独歩の『酒中日記』（明治 35）五月八日には「今度の設計^{せつけい}なら決して高い予算じや御座いませんよ、」とある。

項目末の「意味」の解説において、「設計」は明治時代の新語とされている。中国語との関係は触れられておらず、中国語からは独立に作られた語であるかのようにも読めるが、後に述べる通り、実際には「設計」は古来中国語に動詞句として存在した言い回しを日本人が一語化して名詞にし、新たな用法を与えたものである。

「設計」が英語の design の訳語であるという見方は、以下で見るほかのすべての研究にも共通する。しかし、上の引用に見る限りでも、「設計」は英語の plan、plot、project、scheme や、フランス語の plan、dessin などの訳語としても使われている。逆に、英語の design の側から見ても、その多義のすべてが「設計」と訳されるわけではなく、「計画」「設計図」「意匠」「デザイン」などの多くの訳語がある。例えば、“draw a design of the building” と言うときの design は訳せば「設計図」などであり、“like the design but hate the color” と言うときの design は通常「デザイン」である。そのような文脈で「設計」とは普通言わない。そのように原語と訳語が多対多の複雑な対応関係にある以上、「設計」が英語の design の訳語だと単純化して述べたのでは事実の満足な説明にならない。¹⁴

¹² 惣郷・飛田編では Plot が Plat と書かれているが、当該の神田^{ないぶ}乃武他編『模範英和辞典』（1911（明治 44）年）に基づいて訂正して引用した。

¹³ 惣郷・飛田編では「もくろみ」が「もくらみ」と書かれているが、当該の山田美妙『大辞典』（1912（明治 45）年）に基づいて訂正して引用した。

¹⁴ これは「設計」に限ったことではなく、“～は～の訳語だ” という形の説明は広く見られる。しかし、そのような言い回しはさまざまに解釈することができる。記述の正確さが求められる文脈においては、当該の 2 語が 1 対 1 に近い対訳関係にある場合や誤解の恐れがない場合を除き、そのような単純な言い回しの使用は避けるべきである。

また、訳語の原語が英語だと安直に決め付けることも慎まなければならない。この問題についてはつとに斎藤（1958）が次のように警告を発している。

英米独仏などの原書を直接読破する以前に、これらの国々において出版された自然科学関係の専門書類はオランダ語を通じて和訳せられ、重訳せられた、そしてそれらの和訳本に用いられた術語類が一般化していたので、英米独仏の書類を直接に読み、それを翻訳する場合には、既に出て上っていたオランダ系統の翻訳借用語、即ち translation loan-words を用いたのであって、オランダからの翻訳借用語と独立に、英米独仏の書類を翻訳したのではない。このことは近代日本の文化史および近代日本語の語源という立場から極めて重要な史実であって、この事実を無視すると、とんで

また、「設計」が日本の辞書に書かれたのは明治 29 年すなわち 1896 年が最初であるかのような記述になっているが、筆者による確認の限りでは辞書におけるその出現は明治初年にさかのぼる。吉田賢輔編『英和字典』（1872（明治 5）年）の少なくとも次の 3 項目に「設計」が見出される。発音や活用に関わる記述は省いて引用する（以後同様）。小字で示した日本語訳は筆者による補足である。

Design, *v.t.* 企タテル、指示ス、○計謀、設計、

Ensnare, *v.t.* 罟ニカケル、○設計害人（謀って人を害する）、誘人圈套（人をおびきよせて陥れる）、

Speculator, *n.* 考ヘル人、ヤマ師、目論見スル人、○推理者、図謀者（画策する人）、^{（きようこう）}倣倖的（幸運を求める人）、設計者（計画する人）、¹⁵

「○」に続けて書かれているのは、巻頭の「凡例」によれば「漢人ノ訳字」である。それは、design と ensnare の 2 項目に関しては英華辞典 Walter Henry Medhurst *English and Chinese Dictionary* (1847 ~ 1848（道光 27 ~ 28）年）、speculator に関しては英華辞典 Wilhelm Lobscheid *English and Chinese Dictionary with the Punti¹⁶ and Mandarin Pronunciation* 『英華字典』（1866 ~ 1869（同治 5 ~ 8）年）における中国語の訳語の借用と見られる。したがって、この『英和字典』の記述だけを根拠に当時の日本語で「設計」が語として使われていたと言うことはできないが、後に見る通り現にほぼ同じ時期には文章中における「設計」の語の使用が確かめられる。

津田仙・柳沢信大・大井鎌吉訳『英華和訳字典』（1879（明治 12）年）も上の『英和字典』と同様に、Lobscheid の『英華字典』の訳語と日本語の訳語を併記している。「設計」が現れる項目の一部を示せば次の通りである。

もない時代錯誤におちいり、無意味な結論に到達するのである。

例えば、「反応」という語について、惣郷・飛田編（1986）は「『裏切り・内応』の意味であったが、英語 reaction の訳語となり化学変化の意味に転じた」と述べ、『日本国語大辞典』第 2 版第 11 巻（小学館、2001 年）も「英 reaction の訳語」とする。しかし、馮（2022）が明らかにしたところによれば、「反応」は 1860（万延 1）年ごろに蘭方医学の領域においてオランダ語の terugwerking を訳して作られた語である——英蘭・蘭英辞典 Johannes Holtrop *Nieuw Nederduitsch en Engelsch Woordenboek*（英語書名 *A New English and Dutch Dictionary*）（1801 年）は蘭英の部で terug を back again、werking を working、operation、influence と説明している——。惣郷・飛田編（1986）も『日本国語大辞典』第 2 版も明治期以後の用例だけを見て語史を考えているために斎藤の言う「時代錯誤」に陥っている。

¹⁵ 最後のところが実際には「倣倖的设计者、」と印刷されているが、「倣倖的、设计者、」と訂正して引用した。

¹⁶ 書名中の Punti は広東を表す「本地」の広東語読みである。同辞典は訳語にも例句にも広東語と官話両様の発音を示している。

Contrive, *v.t.* (中略) to contrive a plan, 設計, 設謀, 作計, ハカリゴト ヲ ^(ママ)モウケル, クフウ ヲ スル; (後略)

Design, *v.t.* to sketch, 描画, 図画, 絵様子, 画形図, カク, ヒク, ツドル; to plan, 設計, 立計謀, 図謀, 画策, 籌策, ハカル, ツモル, クフウ スル; (後略)

Plan, *n.* draught, 図, ツ (中略); to devise a plan, 設計, 設法, ハカリゴト ヲ マウケル; to make a plan, 絵図, ツ ヲ ツクル; (後略)

Plot, *v.t.* to plan, 謀, 設計, 設謀, 図謀, 作計, 構, ハカル, クハダテル, モクロム; (後略)

柴田昌吉・子安峻『増補訂正英和字彙』第二版(1882(明治15)年)には日本語の表現として書かれた「設計」が現れる。その一部を示す。

Attempt, *n.* 試看。設計。勉強

Design, *vt.* or *i.* 画ク。摸ス。設計スル。画策スル。図ル。外形ヲ画ク。企ツル。想フ。意匠スル

Plot, *vi.* or *t.* 謀叛スル。徒党スル。設計スル

Project, *n.* 設計。計策。画図

この辞書は英華辞典からの直接的な引用を含まず、また、design と plot の項目では「設計」に「スル」が付けてあることから分かるように、訳語は中国語ではなく日本語の表現として示されている。ただし、その「設計」がすべてセツケイという読みの語として書かれているかどうかは不明である。「設計」は現代人にはセツケイとしか読めないが、当時はしばしば「くわだつ (くわだて)」や「もくろむ (もくろみ)」という和語¹⁷の表記としても使われていたからである。しかし、後に見る通り、「設計」は現に明治初年にはすでにセツケイとも読まれていたと考えられ、『増補訂正英和字彙』第二版の少なくとも「設計スル」の「設計」はセツケイと読んでも差し支えないと思われる。なお、同辞典の初版に当たる柴田昌吉・子安峻『附音挿図英和字彙』(1873(明治6)年)の design や plot の項目には「設計スル」という訳語は見られない。¹⁸

¹⁷「もくろむ」は語源的には「目論」という漢語に由来すると言われる。しかし、それが事実だとしても、「もくろむ」は和語の動詞である。

¹⁸『増補訂正英和字彙』第二版の1887(明治20)年に出版された再版においては語釈に割り注の形で仮名が添えられ、attempt の項目では「設計^{セツケイ}スル」、design の項目では「設計^{セツケイ}スル」、plot の項目では「設計^{セツケイ}スル」、project の項目では「設計^{セツケイ}」と書かれている。モクロムスルとは読めないで、「モクロム」などの仮名は「設計」の読みではなく意味を示すもののように思われる。ただし、だからと言って「設計」をす

惣郷・飛田編（1986）に引用された辞書類および上記の英和辞典3件における記述から、「設計」が当時「くわだて」「もくろみ」「はかりごと」「画策」「計画」「工夫」などの多くの語と意味上近接ないし重複する関係にあったことが分かる。現代語の感覚では必ずしもそのように感じられないが、それはその後各語に意味変化が生じたということを意味する。例えば、「設計」「計画」「企画」という3つの名詞を比べてみれば、現代では「設計」は建物や機械、「計画」は事業や活動、「企画」は催し事について言うことが多い。しかし、それらのあいだには本来それほど明確な差はなく、時間の経過の中で単義に向かう変化によって意味の差別化が起きたものと考えられる。

『日本国語大辞典』第2版第7巻（小学館、2001年）における「設計」の項目の記述は次の通りである。ここでは通常の文章における「設計」の出現例も紹介されている。見やすさのために用例ごとに改行して示す。

せつ-けい【設計】〔名〕

- ①工事・工作などで、工費・材料・敷地・形式などの計画を立て、図面その他によって具体的に示すこと。みつもり。もくろみ。

東京市区改正条例（明治二一年）（1888）一条「東京市区改正の設計及毎年度に於て施行すべき事業を議定する為め」

数学二用キル辞ノ英和对訳字書（1889）〈藤沢利喜太郎〉「Design 設計」

酒中日記（1902）〈国木田独歩〉五月八日「今度の設計（セッケイ）なら決して高い予算じゃ御座いませんよ」

春と修羅（1924）〈宮沢賢治〉オホーツク挽歌「すべて天上技師 Nature 氏のごく斬新な設計だ」

帰郷（1948）〈大仏次郎〉過去「幾何の図面のやうに設計された西洋式の公園の芝生や人工的な噴水」

- ②（比喩的に）人生・生活などの計画を立てること。

家（1910-11）〈島崎藤村〉上・三「谷を耕地に宛てたこと、山の傾斜を村落に択んだこと〈略〉すべて先祖の設計に成ったものであった」

パノラマ島綺譚（1926-27）〈江戸川乱歩〉二「一体何を夢見てみたかと云ひますと、それは、彼自身の理想郷、無可有郷のこまごました設計（セッケイ）についてでありました」

べてセッケイと読んでよい、セッケイとしか読めないと言えるわけではない。

『附音挿図英和字彙』と『増補訂正英和字彙』の各版における訳語のあり方は複雑でさらに議論の余地があるが、目下の文脈でその詳細に立ち入る意味は乏しく、ここでは以上の言及にとどめる。

胤銃（1949）〈井上靖〉みどりの手紙「今度こそ新規まき直しに私の本当の幸福を
発見するつもりで生活の設計を真面目に考へて居ります」

〔補注〕明治二〇年代後半から design の訳語として外国語辞書、学術用語集に登場する
が、中国洋学書の影響と考えられる。

項目末の「補注」に「設計」が明治 20 年代後半から design の訳語として辞書類に書かれる
ようになったとあるのは惣郷・飛田編（1986）の記述に一致する。

「中国洋学書の影響と考えられる」という新たに示された見解の根拠、詳細は不明である。
筆者の調査の限りでは、日本語と同様の性質を持つと判断できる「設計」は中国の 19 世紀
の漢訳洋書の類には見られない。したがって、その見解は有効な証拠が示されない限り、単
なる仮説にとどまると言わざるを得ない。日本語の「設計」という語が 19 世紀の英華辞典
を利用して作られたという可能性は考え得るが——この問題は後に検討する——、かりにそ
うだとしても初期の英華辞典はすべて西洋人によって西洋人の中国語学習のために編まれて
おり、洋学書、すなわち、中国人が西洋の学問を学ぶための書籍の範疇には入らない。

『日本国語大辞典』の記述のもう 1 つの重要な問題は、「設計」の語史の初期相に関する適
切な情報を提示できていないことにある。それには 2 つの要素がある。第 1 に、「設計」が
辞書類に明治 20 年代後半から登場すると言うが——上述の通り、実際にはそれよりもかな
り早かったが——、言語の歴史を考慮した日本語辞典が説明すべきは、辞書という特殊な狭
い世界ではなく現実社会の日本語に関する事実である。辞書は新語の収録に関して現実の言
語よりも遅れることが多く、辞書の記述から分かることが現実の語史に一致すると期待する
ことはできない。第 2 に、『日本国語大辞典』に挙げられた最も早い用例は 1888（明治 21）
年の「東京市区改正条例」におけるものであるが、「設計」は実際には後に見る通り明治初
年から使われていた。

3.2 中国語の「設計」——莊・周（2010）、董（2002, 2011）

莊・周（2010）は、19 世紀前半の入華西洋人宣教師による中国語の著作に現れる新語に
関する研究である。「設計」に関する議論は次の記述で始まる。

近代汉语“设计”指做事设下计谋，陷害他人，多有贬义。（中略）可是，现代汉语“设计”
是指“在正式做某项工作之前，根据一定的目的的要求，预先制定方法、图样等”或“设
计的方案或规划的蓝图等”。它是英语 design（一为动词，一为名词）的对应词。（近代¹⁹

¹⁹ 原文の「近代」を訳文にそのまま使ったが、実際には日本で言う近代よりも古い時代を指している。
引用において中略した部分には、18 世紀の『紅樓夢』における「設計」の用例が挙げられている。

中国語の「設計」は、事をなすに際して策略を設け、他人を陥れて害を及ぼすことを表し、しばしば否定的評価を伴う。しかし、現代中国語の「設計」は“ある仕事を実際に行う前に、一定の目的の要求に基づいて方法を決めたり図面を描いたりすること”あるいは“考案した計画や描いた青写真など”を表す。「設計」は英語の design（動詞および名詞）に対応する語である。）

旧来の「設計」は古代から使われていた。そして、19 世紀後半に創刊され、20 世紀中葉まで発行された有力全国紙『申報』を調べると——「申報数拠庫」(<http://www.sbsjk.com/>) を使用——、20 世紀に至るまで古い用法が高い頻度で記事中に出現することが確かめられる。

『漢語大詞典』第 11 卷（漢語大詞典出版社、1993 年）の挙げる「設計」の最も早い用例は次のものである。先行文脈を拡大して示す。

吾語大將軍，不可不廢之，前後数次。此兒具聞，自知罪重，便因為弑逆，賂遺吾左右人，令因吾服藥，密行酖毒，重相設計。（私は前後数十回も、この子を何としても退位させるべきだと大將軍に告げた。この子は詳しくその間の事情を聴取し、自身その罪過が重いことを悟るや、暗殺を図り、私の側近の者に賄賂をおくり、私が薬をのむときを利用して、ひそかに酖毒（酖羽を酒にいれた毒薬）を入れさせようと、再度にわたって計画した。）

（陳寿『三国志 魏志卷四』高貴郷公髦伝、3 世紀）²⁰

この例がそうであるように、そして、莊・周の指摘にもある通り、旧来の「設計」は策略によって他者の意志や希望に反する行為、とりわけ、他者に害を及ぼす行為——人を殺す、害する、陥れる、誘拐するなど——について使われることが多い。ただし、用例の頻度は低いものの、次のように他者の意向に反するという要素のない文脈で「設計」が用いられていることも古くからある。

今者水災東南特劇，非但五稼不収，居業并損。下田所在停汚，高地皆多磽瘠，此即百姓困窮，方在来年。雖詔書切，告長吏二千石，為之設計，而不廓開大制，定其趣舍之宜，恐徒文具，所益蓋薄。（今、水災は東南が特にはげしく、五穀が収められないばかりでなく、住居や仕事とともに駄目になり、低い耕地は水がたまり、高い耕地はやせてしまい、来年になったら人々は困窮するのであろう。地方長官はそのために計画を立て、大制をつくり、趣舍よろしきをえなければ、なにもならない。）

（杜預 上疏文、277（咸寧 3）年）²¹

²⁰ 引用は 1739（乾隆 4）年の刊本による。日本語訳は今鷹・井波訳（1977）による。

²¹ 引用は房玄齡他『晋書』（648（貞観 22）年）に第二十六卷として収められた「志 第十六卷 食貨」に

莊・周は、上に引用したくだりに述べられた「設計」の「語義転変」(語義の変化)がいつ起きたのかという問題について、“近現代漢語新詞源詞典編輯委員会編(2001)や蔣(2004)は19世紀末の『清議報』や『時務報』における「設計」の出現を指摘しているが、語義の変化はさらに早く1830年代に起きた”とする。そして、その証拠として馬老先生『古聖奉神天啓示道家訓』(1832(道光12)年)——「馬老先生」は英国人宣教師ロバート・モリソン(Robert Morrison、中国名馬礼遜)を指す——における「設計」という表現の例を3つ挙げている。確かに同書の神による天地創造を説くくだりに「設計」は繰り返し出現する。“荒野に落ちている石と異なり時計や望遠鏡は人が意図的に作り出したものだ、それと同じように動植物は神が意図的に作り出したものだ”ということを説明する文脈において、「設計製造」(「設計」して作り出す)「故意設計」(意図的に“設計”する)「原設計者」(最初に“設計”した人)などの形で25回以上使われている。

『古聖奉神天啓示道家訓』での「設計」は、事物の製作に関わることを語るのに使われているという点において現代的な意味に共通する。しかし、実のところそれは旧来の用法にとどまっているように筆者には思われる。現代の「設計」の大きな特徴は、文型の非重複的な拡張により、設計の対象となる事物を表す名詞句を新たに目的語として取る動詞として使える——例えば、「設計大楼」のように言える——という点にある。しかし、同書に「設計製造」「設計造作」(“設計”して作り出す)や「設計造制万有」(“設計”して万物を作り出す)などの言い回しは出て来るが、「設計時辰表」(時計を設計する)や「設計万有」(万物を設計する)のように直後に目的語として名詞句を従える言い回しは一度も出て来ない。同書における「設計」は意図していることの“計を設ける”、“実現の方法を考える”のような意味を表す旧来の動詞句だと考えるのが妥当であろう。²²

ちなみに、共通する性質を持つ「設計」の事例は日本ではさらに早く見られる。建物の建築に関わる文脈における使用である。

公与論兵法大説之、遂留之。因与密議、設計新建八幡祠。(木曾義仲)公は(大夫坊覚明と)ともに兵法を論じて大いに語り、ついに留ませた。そして、二人で密議して新たに八幡祠を建てる計画を立てた。(山村良由『木曾宣公旧里碑』、1813(文化10)年)²³

よる。17世紀における刊本を使用した。日本語訳は佐久間(1964)による。訳文にも使われている「趣舍」は辞書によれば「取捨」を表す。

²² 着目している近代語に字面上一致する表現を漢訳洋書や英華辞典中に見出せても、それが当の語であると即断することはできない。その意味や文法的性質を確かめる必要があることを陳(2019a)が第III部第1章で論じている。

²³ 碑文を収めた刊本(県立長野図書館蔵)が「信州デジタルコモンズ」のWebサイト(<https://www.ro-da.jp/shinshu-dcommons/>)において画像の形で公開されている。碑文の最後に「文化十年癸酉秋八月」とある。刊本に刊行年は記されていないが、碑文の後に碑額の隷書を書いた人物と石面に文字を彫った

ここでも「設計」の後ろには「新建八幡祠」（新たに八幡祠を建てる）という動詞句が続いている。ただし、前に「密議」とあるので、旧来の用法に典型的な、他者の意向に反することを行うという要素を伴っていると見るべきかも知れない。

『古聖奉神天啓示道家訓』では、「設計」と同じ意味を表すと見られる「立計」および「設計策」——念のために言えば、これは「設計+策」ではなく「設+計策」という構成である——という表現も繰り返し使われている。「造原表者之妙計」（最初の時計を造った人の妙計）のように直前に動詞を置かない「計」の使用も見られる。これらの事実も、少なくとも同書における「設計」が規則的に組み立てられる動詞句の1つにとどまっていることを示唆している。莊・周は「設計」の変化を単なる語義の交替と見なしているが、私見によればそれは正確な理解ではない。「設計」の語義の変化は動詞句が一語化するという文法的な変更に伴って生じたものである。

「設」と「計」を組み合わせた言い回しは、『古聖奉神天啓示道家訓』よりも早い時期の西洋人宣教師の著作中に見出される。

神父者可憐我世間人，而設救我靈之計。（神は世の人々を哀れみ、その魂を救う方法を考えた。）

（博愛者（William Milne、米憐）纂『幼学浅解問答』、1816（嘉慶21）年）

神天因可憐世人至極，故而設救之計。（神は世人を大いに哀れみ、それを救う方法を考えた。）

（種徳者（David Collie、高大衛）纂『天鏡明鑑』、1826（道光6）年）

『古聖奉神天啓示道家訓』に現れる「設計」はこのような表現法と類を成すものと考えられる。

もし『古聖奉神天啓示道家訓』における「設計」の用法が新しいものだと言うとすれば、なぜそれがその後中国で姿を消し、19世紀末になって初めて復活し、そして、急速に普及したのかという語史の不連続に関わる問題も生じる。私見によれば、「設計」の一語化と用法の変化は明治初年の日本で生じ——幕末であった可能性もあるが、今のところ資料的にそれを確かめることができていない——、それが19世紀末以後に中国に伝播し普及した。中国語における「設計」の語史は日本語との関係を考慮に入れなければ満足に記述することができない。

董（2002）は、中国語における2字語の発生と歴史に関する研究である。「動詞+目的語」という形の動詞句の2字語化を論じた節において「設計」が事例の1つとして挙げられている。董は『三国志』その他の例を挙げて「設計」が本来「設下計謀」（策略を設ける）を表す

動詞句であったと説明したうえで、次のように述べている。董(2002)の修訂本である董(2011)における記述もこれと共通である。

由於“設”的弱動作性、“計”的非具體性以及二者之間的低影響度，“設計”符合詞彙化的條件，後來變成了一個動詞，指根據一定要求，對某項工作預先制定圖樣或方案。如：

趙爾巽署戶部尚書，設計學館，令司員赴學。(清胡思敬《國聞備乘》卷一)

(「設」の弱動作性と「計」の非具体性および両者間の低影響度のために、「設計」は語彙化の条件に合致し、後に1つの動詞となり、“一定の要求により、ある仕事のためにあらかじめ図面や方法を定めること”を表すようになった。例えば、

ちょうじそん
趙爾巽は戸部尚書に就任し、学館を設計して、職員をそこで学ばせた。(胡思敬『国聞備乗』²⁴ 卷一))

しかし、この董の説明には2つの問題がある。その第1は、沈(2017)、沈編著(2019)が指摘するように、董は動詞句の一語化を中国語の内発的、自律的な変化と見なし——すなわち、一定の条件が満たされたことによって一語化が起きたと考え——、外国語との接触による影響の結果である可能性を考慮に入れていないことにある。そのような考察の方法では、中国語の歴史における19世紀末から20世紀初期にかけての特定の短期間に「設計」の一語化が起き、かつ、急速に普及したという事実の説明を与えることができない。

第2に、「設計」という動詞句から自律的な変化によって動詞が生じたとする説明は、その動詞がなぜ“一定の要求により、ある仕事のためにあらかじめ図面や方法を定めること”を表すようになったのかという問題の存在を見逃している。“策略を設ける”という意味の動詞句が動詞に変わるにしても、意味がそれほど大きく変わらなければならない理由がない。なぜ“図面”や“方法”なのか。なぜ旧来の「設計」がしばしば表していた“密かに策を練る”、“他人に害を及ぼす”といった要素を捨て去ったのか。実のところ、中国語の新しい「設計」の用法は明治期の日本で形成された用法にほぼ完全に一致する。

中国語における「設計」の一語化は中国語の内発的な変化ではなく、日本語の表現の借用の結果だと考えるのが自然である。

3.3 日中両語の「設計」—— Fujita (2016)

以上において見てきた記述、研究はいずれも日本語か中国語のどちらか一方の見地から「設計」の語史を考えたものであった。『日本国語大辞典』に「設計」は中国洋学書の影響と考えられるという見解は述べられていたが、その実質は不明であった。

²⁴ 巻頭の自序に「宣統辛亥十月」、1911年の日付が記されている。

それに対し、言語研究ではなく design の概念のアジアにおける名称という観点から日中両語の「設計」の語史を考察した Fujita (2016) は、その出現、使用の状況を通時的に調査し、日中両語間の相互影響や用法差などを論じている。

Fujita は論文の前半では、19 世紀に編まれた中国の英華辞典と日本の英和辞典を調査し、「設計」が早くは動詞 design の語釈として英華辞典 Walter Henry Medhurst *English and Chinese Dictionary* (3.1) に現れること、その後 Wilhelm Lobscheid *English and Chinese Dictionary with the Punti and Mandarin Pronunciation* 『英華字典』(3.1) にも現れ、同辞典に基づいて編まれた日本の英和辞典にも引き継がれたことを指摘している。そして、1880 年代末の藤沢利喜太郎編『数学二用キル辞ノ英和対訳字書』(1889 (明治 22) 年) では「設計」が初めて design の唯一の訳語とされたとも述べる。吉田賢輔編『英和字典』(1872 (明治 5) 年) や柴田昌吉・子安峻『増補訂正英和字彙』第二版 (1882 (明治 15) 年) における「設計」の出現 (3.1) が見落とされてはいるが、著者が異分野の専門家であることを考えれば周知な調査である。

Fujita も、英華辞典の design などの項目に語釈として書かれた「設計」を中国語の語と見なしているが、私見によればそれは「設+計」という動詞句であり、意味的にも“策を練る”、“計画を立てる”などの旧義にとどまっている——「設計」は、例えば design の多義の 1 つとしての “to plan” の語釈として「計謀」「希図」「画策」(Medhurst)、「立計謀」「図謀」「画策」「籌策」(Lobscheid) とともに挙げられている——。『古聖奉神天啓示道家訓』の「設計」について述べたところ (3.2) と同じである。中国語における「設計」の 1 語としての使用は 19 世紀末以後の現象である。

Fujita は後半においては、日本と中国の過去の出版物の書名などにおける「設計」の使用状況を調査している。それによれば、日本では書名に「設計」を含む書籍が 19 世紀末から出版されている——立川知方編『洋館建築設計書々式』(1894 (明治 27) 年)、文部大臣官房会計課建築掛『学校建築図説明及設計大要』(1895 (明治 28) 年)——が、中国における最初の書籍は 1920 年代のものであった——松濤泰巖^{まつなみたいがん}著、林本・朱兆萃・李宗武訳『設計教育大全』(1923 (民国 12) 年)²⁵——。興味深い指摘であるが、この時間差の意味も考える価値がある。単に時間差があるだけでなく、辞書において英華辞典の「設計」が日本の英和辞典に引き継がれたという事実には照らせば、時間の前後が逆転してもいるからである。

私見を結論的に述べれば、次の通りである。すなわち、すでに触れた通り、「設計」という中国語の動詞句の一語化と新たな用法の創出は明治初年の日本で行われ、それが 19 世紀末以後に中国に伝播し普及した。そして、19 世紀の中国の英華辞典に「設計」という漢字

25 原本は松濤泰巖『全我活動の教育 プロジェクト・メソッド』(1922 (大正 11) 年)。原本の「プロジェクト」が中国語版の「設計」に対応している。

連接は書かれていたが、それは旧義を表す古来の動詞句で、書名の文脈で使われることはなかった。それが新義を表す語になって初めて書名中に現れやすくなった。それが、時間差、時間の逆転の理由である。

語の歴史を辞書の記述や書名などの局限された文脈の調査によって明らかにすることはむずかしい。『設計教育大全』に言う「設計」は、米国で提唱された教育法である project method が中国で「設計教学（教育、教授）法」の名で注目を集めたことに基づいているが、Fujita の“日本語の「設計」は 1890 年代に主に工学的な design の訳語として使われ始めたのに対して、中国の新しい「設計」は 1920 年代に学校教育に関して project の訳語として使われ始め、1930 年代初期に工学的な design を表すのにも使われるようになった”という結論は次節で見る通り全面的な見直しを要する。

以下においては、観察の対象を辞書や書名に限定せず、実際の文中における「設計」の使用状況を確認することにより、「設計」の語の用法の日中各語における初期の様相を可能な限り正確に明らかにしてみたい。

4 「設計」の近現代語史

すでに述べた通り、「設計」は古来使われてきた中国語の動詞句であったが、明治初年の日本人がそれを一語化して新しい意味を与え、「～が～を設計する」という非重複的な拡張による文型も作り出した。そして、それは 19 世紀末以後に中国語に借用され、「設計」の中心的な用法になった。

「設計」は本来漢語では「画策」「計画」「工夫」「意匠」など、和語では「くわだて」「もくろみ」「はかりごと」などと意味上重なっていた。その後「プラン」「デザイン」などの外来語も加わって、類義の複雑な相関を成している。したがって、理想を言えば、「設計」の語史を考えるには関係するすべての語の歴史を同時に考える必要がある。しかし、関連語の語史をすべて確かめるのはあまりに複雑な課題であり、しかも、「設計」以外の語はそもそもこの小論の主題には関わらないので、ここではもっぱら「設計」を考察の対象とする。

4.1 使用の初期相

中国語の「設計」は本来、実現のむずかしいことを実現するためにその方法、方策を考案することを表す動詞句であった。日本の漢文では「計^{けい}を設く」「計^{はかりごと}を設く」と訓読され、そして、和文でもそれらの言い回しが使われていた。「設_レ計」単独で文の述語になることができ、また、別の動詞句の前に置かれてその全体で“計を設けて～する”ということを表すのにも使われた。

日本語における「設計」の語史を考えようとするときにまず注意を要するのは、すでに触れた通り、「設計」という漢字表記が必ずしもセッケイという漢語を表しているとは限らず、「くわだつ」や「もくろむ」などの和語を表している可能性があるという事実である（3.1）。英和辞典における例はすでに見たが（注 18）、明治初年に海軍省の出版した『万国海上信号書』における数字旗を使って伝達される信号文の説明の例を次に示す。同書は Guildford Barker Richardson *The Universal Code of Signals for the Mercantile Marine of All Nations*（1869 年）の翻訳であり、英語の原文を括弧内に添えて示す。²⁶

- 七一四 我_レ其事ヲ今一度企ツ可キヤ（Shall make another attempt?）
 七一五 我_レ其事ヲ今一度企ツヘシ（I shall make another attempt）
 七一六 我_レ企ヲ為ス可シ（I shall make the attempt）
 七一八 汝企ヲ為スヤ（Shall you make the attempt?）
 七一九 我_レ（或ハ指示セル船）^{クワダテ}設計ヲ行フト雖モ其功無カリシ（I *(or ves. ind.)*²⁷ made the attempt but did not succeed）
 七二〇 我_レ一ヲ設計ツ可シ（I shall attempt to）
 七二一 今一度^{ハカ}図レ（Make another attempt）
 七二三 百方設計ヲ為セリ（Every attempt has been made）
 （南郷茂光訳『万国海上信号書』、1874（明治 7）年）

原文の attempt や make an attempt が「企ツ」「企ヲ為ス」「図レ」などと訳されていることが分かる。「設計」という漢字表記は 3 度出て来るが、その読みの示されていない現れのうち「設計ツ」（七二〇番）の読みはクワダツであろうから、最後の信号文（七二三番）の「設計」もクワダテであろう。「設計」がそのように和語の表記に使われていたという事実は「設計」という語の歴史を考えるうえで意味面での参考にはなるが、クワダツ、クワダテと読まれた「設計」は「設計」の語史には属さない。以後においては和語の表記であることが分かる「設計」は取り上げない。したがって、単に「設計」と書くことでセッケイという読みの「設計」——正確に言えば、セッケイと読まれた可能性が十分にあると考えられる「設計」——を表すものとする。また、動詞句としての「設計」に言及する必要があるときには、必要に応じて返り点や修飾の語句を加えてそれを明示する。

さて、筆者の調査で確認できた限りでは、「設計」という語の最初の用例は 1873（明治 6）

²⁶ 信号文の番号に不連続があるのは原文の通りである。そして、それは英語の原著においても同様である。

²⁷ 念のために言えば、ves. ind. は vessel indicated の略であろう。

年に書かれた資料中に見出される。「明治六年第十二月」という日付の記された淀川改修に関する大蔵省土木寮の文書にそれが現れる。筆者には一貫した解釈のむずかしい要素を一部に含んでいるが、推測に頼って調整を施した大意を括弧内に添えて示す——調整の当否は「設計」に関する議論には影響しない——。以後、用例の引用に際しては句読点の補充や調整を施すことがある。

右三名ノ工師淀川河状水勢測量ニ取掛リ候様相達候。然ルニ右測量引続工業ニ及スト否トハ自然操事ノ精粗順序モ之レ有リ候儀ニテ、但先測量ヲ遂ケ次テ工事ノ設計ヲ為シ直ニ実地ニ施スハ始ヨリ其目途ヲ以テ手ヲ下シ又試ミニ測量施計ヲ為シ他日工ヲ興スカ如キハ実地施行ノ時ニ臨ミ必再検ヲ要シ一次ノ精検モ或ハ空ニ属シ候条、今般河状水勢測量ハ次テ実地ニ施行ノ目途ヲ以テ実測スヘキ歟又ハ他日工ヲ興スノ目的ヲ以テ事ヲ処スヘキ歟至急報告致シ呉候様右工師共連々申出候次第モ有之（後略）（右3名のオランダ人技師に淀川の河状水勢の測量に着手するよう指示したところ、“測量に引き続いて工事を行うかどうかによって測量の精粗や順序も違ってくる、測量に引き続き工事の計画を立て直ちに実施するのならよいが、試みに測量や立案を行い後日工事を行うというのでは実地の施工の際に必ず再検査を要し、今精密な測量を行っても無駄になる、したがって、今般の河状水勢の測量は引き続き施工するものと考えて行えばよいのか、それとも、将来の工事のための測量を行うということなのか至急知らせしてほしい”という技師たちの申し出もあったので～）

（大蔵卿大隈重信が右大臣岩倉具視にあてた伺書「淀川修治ノ儀ニ付伺」に別紙として添えられた土木頭小野義真^{きしん}の伺書、1873（明治6）年）²⁸

淀川の測量、改修計画の作成、工事の実施という作業の流れを述べた箇所では「工事ノ設計ヲ為シ」という言い回しが使われている。「設計」は、今確かめ得る明治初年の用例の限りでは、このように河川の改修、あるいは、港湾や道路の建設、鉄道の敷設、市区改正——すなわち、都市改造——といった社会基盤整備のための大規模な工事に関わる文脈での使用が多い。「設計」という本来の動詞句が、容易には達成できないことを実現する方策を考えることを表すという事実を考えればもっともなことだと言える。そのような方面の文書が残りやすいという要素があったことも考え得るが、後に見るように、現に建築などの分野においては「設計」の普及が遅かったことを示す事実もある。

²⁸ この文書は『公文録 大蔵省之部 一』（1874（明治7）年）に綴じて収められている。『公文録』は国立公文書館デジタルアーカイブ（<https://www.digital.archives.go.jp/>）における解説によれば「明治元年（1868）から明治18年（1885）までの、太政官が各省との間で授受した文書を、年次別・機関別に編纂したもの」であり、同サイトで画像が公開されている。

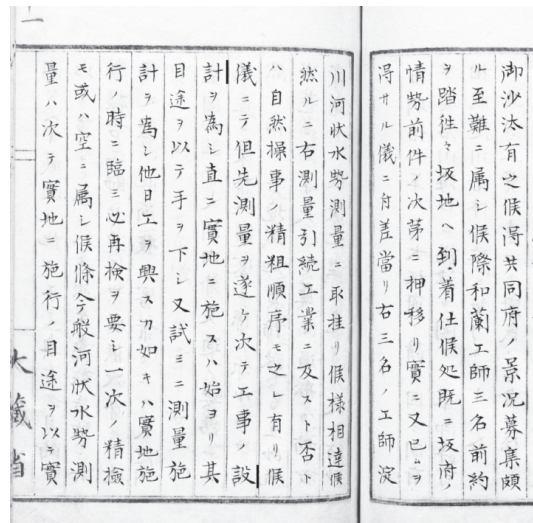


図1 大蔵省土木寮伺書（国立公文書館蔵）

「設計」という語、名詞がどのような状況为背景として成立したかは残念ながら不明である。まず、上の伺書で「設計」はオランダ人の意見を述べたくだりに出て来るので——「右三名ノ工師」はオランダ人の土木技師を指す——、「設計」がオランダ語の表現を翻訳するために作り出されたということも考えられる。また、幕末以後オランダ人より早く仏英各国の技師も来日しているので（淀川百年史編集委員会編（1974））、フランス語や英語の表現の翻訳として作られた可能性もある。しかし、その真相を確かめるすべはない。

「設計」という語形が選ばれた経緯もはっきりしないが、漢文に現れる旧来の「設計」を直読して一語化したということではないかと筆者は推定する。想像しやすい別の可能性として、中国の英華辞典に書かれた「設計」という語釈をそのまま語と見なして採用したということも考え得る。先に触れたように（3.1）、Medhurstの英華辞典では design と ensnare の項目で、Lobscheidの英華辞典では contrive、design、designer、ensnare、plan、plot、speculator の各項目で語釈に「設計」が出て来る——そして、Medhurstの語釈は吉田賢輔編『英和字典』にも引かれていた——。その一部を示せば次の通りである。

To DESIGN, to plan, 計謀, 希図, 画策, 設計; (後略)

(Walter Henry Medhurst *English and Chinese Dictionary*,

1847 ~ 1848 (道光 27 ~ 28) 年)

Design, to sketch, 描画, 図画, 絵様子, 画形図; to plan, 設計, 立計謀, 図謀, 画策, 籌策; (後略)

Plan, draught, 図; a scheme, 計, 計謀, 策, 計策, 法子, 方法, 方, 方術, 課; (中略);
to devise a plan, 設計; (後略)

Plot, to plan, 謀, 設計, 設謀, 図謀, 作計, 構; (後略)

(Wilhelm Lobscheid *English and Chinese Dictionary with the Punti and Mandarin Pronunciation* 『英華字典』, 1866 ~ 1869 (同治 5 ~ 8) 年)

Design, *v.t.* 企タテル、指示ス、○計謀、設計、

(吉田賢輔編 『英和字典』、1872 (明治 5) 年)

しかし、これらの辞書において「設計」は必ずしも語釈の列挙において首位に挙げられているわけでもなく、そのような記述からなせ「設計」が選ばれたのかという問題がある。英華辞典との関係を否定することはできないが、間もなく述べる理由もあり、「設計」はむしろ「設_レ計」という漢文の表現を基礎として作られたと筆者は推定する。

翌 1874 (明治 7) 年には工部省製作寮営繕課の組織名に「設計」が使われている。

諸建築一切ノ事務ヲ総括シ、課中ノ事務ヲ分ツテ設計、製図、督役、監材ノ四科ヲ設ク。
(『製作寮営繕課処務規定』、1874 (明治 7) 年)²⁹

淀川改修に関する土木寮文書における「工事ノ設計ヲ為シ」の「設計」はクワダテやモクロミと読むこともできるが、ここでの「設計、製図、督役、監材」は4つの漢語の列挙であろうから、ほぼ確実にセツケイであると言える。

おそらく「設計」はこの時期にはすでにそれなりに広く通じる語になっていた、そして、官庁の組織名に使われたことによってもその普及がいつそう進んだと想像される。稿末の「設計」年表に見る通り、以後ほぼ毎年の資料に「設計」が見出される。調査で確認できた当時の「設計」の用例は、オランダ人技師長(長工師)を務めたコルネリス・ヨハネス・ファン・ドールン (Cornelis Johannes van Doorn) による復命書の翻訳に集中している。その2例を挙げれば次の通りである。

只我考按ニ抛り泊所ヲ造築スヘキ良方ノ設計ヲ挙クルニ止ルノミ。

独棧橋ト波濤ヲ具スルノ棧橋トノ費ヲ比較ス可キ為、我二個ノ計ヲ設ク。

(ファン・ドールン (熱海貞爾訳) 「横浜大船泊所ノ議」、1874 (明治 7) 年)³⁰

²⁹ 引用は内閣記録局編『法規分類大全 第一編 官職門十六 官制 工部省・通信省』(内閣記録局、1891 (明治 24) 年)における翻字による。

³⁰ 国立公文書館デジタルアーカイブで画像が公開されている。

且ツ該水堰ヲ設クルトキハ設計施行ノ日、石巻石坑ヨリ突堤及ヒ水堰ノ築石ヲ運輸スルノ便路トナレバナリ。

（ファン・ドールン（平野重彰訳）「溝^{こうきょく}漚ヲ以テ北上川ヲ海ニ連絡セシムルノ件」、1877（明治10）年）³¹

「横浜大船泊所ノ議」の例に添えて示した第2文には「計ヲ設ク」という表現が使われており、「設計」という語の初期の使用者においてはそのような動詞句としての理解が前提としてあったことが分かる——第1文、第2文ともに、目的実現のための計画案を複数考えるという文脈での話である——。もし英華辞典における「設計」という語釈をただ所与の語として受け止めて使ったのであれば、それを分解して「計ヲ設ク」という形に開くことはしなかったであろう。したがって、「設計」は英華辞典の語釈ではなく漢文の「設計」に基づいて作られたと考えるのがよいのではないかと思われる。

これらの文書についても、復命書の原文が残っていないことから、「設計」がどのような表現を訳したものであるかは確かめることができない。ただし、原文の言語がオランダ語であり、英語ではなかったということだけは分かる。ファン・ドールンの復命書の翻訳においては、一部の専門用語は漢語や和語に訳さず原文の表現の音訳によっていたり、訳語のそばに音訳を併記していたりするるのであるが、それがいずれもオランダ語だと見られるからである。例えば、「横浜大船泊所ノ議」で「^(バーム)吧瑪油ノ類」という注釈を添えられた「テール」はオランダ語の *teer* ——英語では *tar* ——、「繫船杭ノ類」と説明されている「ヂュックダルフ」と「メールパール」はオランダ語の *dukdaalf*, *meerpaal* であろう。また、ファン・ドールン（熱海貞爾訳）「東京水道」（1875（明治8）年）³²で配管部材を表す「辺環」という訳語に書き添えられた「フレンス」はオランダ語の *flens* ——英語では *flange* ——であろう。

「設計」の対象は、すでに見た初出例にあったように工事であることもあれば、工事の結果としての築造物であることもある。用例を確認できる初期の段階からその両様の表現が見られる。

先ツ測量ヲ遂ケ尋テ工事ノ設計ヲ為シ直ニ実地ニ施スハ（後略）

（林友幸「刀根川修築之儀ニ付再伺」、1874（明治7）年）³³

会社ハ水道ノ設計充分ナル者ヲ府ニ出シテ制可ヲ乞フヘク、而シテ他日之ヲ変更スルニ

³¹ 国立公文書館デジタルアーカイブで画像が公開されている。文書名中の「溝漚」は灌漑水路、溝渠、ここでは運河を表す。

³² 確認は東京市役所編『東京市史稿 上水編 第二』（東京市役所、1923（大正12）年）における翻字による。

³³ 国立公文書館デジタルアーカイブで画像が公開されている。

ハ必允許ヲ經ヘシ。

(ファン・ドールン (訳者不明)「水道ノ件」、1874 (明治7) 年)³⁴
 予め広狭水平の測量を施行したるの後は直ちに余をして水戸に再行せしめ、以て確実なる運河の設計を立つことを命ずべし。

(ファン・ドールン (平野重彰訳)「水戸運河の件」、1877 (明治10) 年)³⁵

調査の限りでは、当初は「設計する」のような形の複合動詞は見られず、小野義真土木頭の伺書と林友幸「刀根川修築之儀ニ付再伺」にも見るように、「設計をなす」「設計を立つ」などの言い回しが使われていた。「設計する」の用例は数年遅れて1880 (明治13) 年の資料に初めて見出される。

且氏本邦ニ留ル茲ニ七年余、其設計スル所大ナル者数十件、小ナル者実ニ枚挙ニ遑アラスト雖モ、又皆慎重ヲ加ヘサル無シ。

(石井省一郎 (内務省土木局長)「長工師 藩 杜 崙 氏履歷書」、1880 (明治13) 年)³⁶
 現今着手シタル線路ハ総テ同氏ノ設計シタルモノニシテ、其基本線ノ方向位置ハ乃チ左ノ如シ。

(杉山輯吉「日本鉄道ノ由来及ヒ概況」、『工学叢誌 (工学会員頒布)』³⁷ 第2号、
 1880 (明治13) 年)

確認できる初期の用例が少ないので「設計をなす」「設計を立つ」と「設計する」の使用開始にそのような時間差があったと断定することはできないが、「設計」が独立した通常の名詞として使い始められ、その後「設計する」などの形で複合動詞の構成要素としても使われるようになるまでに若干の時間を要したということはあることである。

そして、「～を設計する」という拡張的な文型の使用も徐々に増えていく。

工師ハ他ニ三計ヲ為シ、其利害得失ヲ比較シ、遂ニ其一ナル虻田村ヨリ運河ヲ開鑿シ以テ北上川ノ水路ヲ浜市村ニ疏通シ野蒜ニ築港スルコトヲ設計シテ最上ノ策トナセリ。

³⁴ 引用は東京市役所編『東京市史稿 上水篇 第二』(東京市役所、1923 (大正12) 年)における翻字による。

³⁵ 引用は近藤仙太郎編『利根川改修沿革考 (明治年間)』(内務省東京土木出張所、1928 (昭和3) 年)における翻字による。原文の仮名はおそらく同種の他の文書と同じく片仮名であったと考えられる。

³⁶ 国立公文書館デジタルアーカイブで画像が公開されている。

³⁷ 『工学叢誌』には紛らわしいことに2つの系列がある。工学会員頒布の『工学叢誌』が1880 (明治13) 年6月の第1号に始まって第8号まで刊行されたが、その後1881 (明治14) 年11月に一般公開の『工学叢誌』として第1巻から再出発した(葉賀 (1985))。

（杉山輯吉「野蒜築港之記」、『工学叢誌（工学会員頒布）』第6号、1881（明治14）年）
（オーストリア） 奥 国 モ亦千八百七十年以来アルペン亜爾伯山脈中有名ノカルスト山ニ於テ十三里余ノ旧復造
 林ヲ設計シ年々新植ヲ施コセリ。（高橋琢也『森林杞憂』、1888（明治21）年）
 凡ソ新ニ鐵道ヲ設計スルニ方リテハ須ラク先ツ機關車ニ付テ十分ノ考察ヲ下スベシ。
 （二見鏡三郎編『土木工学 鐵道編』、1889（明治22）年）

これにより「設計」という新しい名詞が用法的にも文法的にも一通りの成熟を見たと言うことができる。

「設計」のセツケイという読みを推定に頼ることなく初めて確認できるのは、筆者の調査の限りでは、次の新聞記事においてである。記事は実際には総ルビに近いが、異読の可能性の低い字句については振り仮名を省いて引用する。

前号に記せしごとく横浜の築港は日本波止場より神奈川砲台の方へ築出す事になりしが、
 今其設計の模様を聞くに、神奈川砲台の東方千英尺余の所より南方に向ッて延長三千
 八百英尺の水堤を築き（後略）
 （「横浜築港設計の詳細」、『読売新聞』1888（明治21）年6月10日）³⁸

しかし、同紙同年の次の記事では「設計」をモクロミと読ませている。

今聞処に依れば此の工事は鐵道局一等技師原口要氏の設計にして（後略）
 （「鎧橋」、『読売新聞』1888（明治21）年3月31日）

当時の資料中に現れた「設計」の読みは振り仮名や文脈の手がかりがなければ確実に分らないことにあらためて注意が必要である。

4.2 普及と展開

「設計」は当初出現の文脈がもっぱら公文書や学術誌の論文に限られていたが、明治中葉

³⁸ 同年の複数の資料に「設計」という振り仮名の付いた表記が現れるが、この新聞記事が最も早い日付のものである。

ちなみに、辞書においてセツケイの読みを初めて確認できるのはさらに遅く、英国人外交官ジョン・ガビンズ（John Harington Gubbins）の著した漢語辞典における次の記述である。

Sek-kei 設計, *suru*, to devise a scheme; concoct a plan.

（John Harington Gubbins *A Dictionary of Chinese-Japanese Words*, Part III, ジェー・エッチ・ガビンズ『漢語英訳辞典』第三冊、1892（明治25）年）

になると一般の出版物にも見られるようになる。すぐ上に新聞記事の例を1件挙げたが——「横浜築港設計の詳細」の記事——、ほかに次のようなものがある。

和洋建築物の計画、設計、洋風器物及び室内粧飾等万般に関する製図及び監督其他請負
（帝国工業会社創立事務所の広告、『読売新聞』1887（明治20）年10月9日）
東京市区改正を実行するに就ては彼の家屋建築法を嚴重にし、改正設計に基づき種々の制限を立て一等乃至三等道路に沿ふ家屋は平屋を禁じ建築材料は煉瓦石若くは土蔵のみに限らるべしと云へり。

（「家屋建築規則」、『東京朝日新聞』1888（明治21）年8月26日）
而して其の改正【＝東京市区改正（引用者注）】は如何程目醒ましき者なるかと云ふに、（中略）其眼目たる設計は、町幅を取広くと、新河寧ろ溝渠を開鑿すると、大小の公園を設くと、新橋と上野間の鐵道を聯絡せしむる位の事に過ぎずと云へり。

（「百年後の大計」、『国民之友』第29号、1888（明治21）年）
工事未だ竣工に至らざるも設計測量既に成りて鐵道敷設に着手したるものあり。

今日築港を計画する者は築港の案設計及測量等に十分なる注意を加へざるべからず。

（「築港論の流行」、『東京經濟雜誌』第426号、1888（明治21）年）

これにより、一般の日本人が「設計」に接する機会が増えていったはずである。

もっとも、19世紀の日本語の辞書はほとんど「設計」の語を載せていない。惣郷・飛田編（1986）の記述にも見る通り漢語辞典などに若干の例外はあるが、19世紀末に相次いで出版された以下の大型の国語辞典のいずれにも「設計」の項目はない。

大槻文彦『日本辞書 言海』第三冊（1890（明治23）年）

山田美妙『日本大辞書』第九卷（1893（明治26）年）

物集高見^{もずめ}『日本大辞林』（1894（明治27）年）

藤井乙男^{おと お}・草野清民^{きよたみ}編『帝国大辞典』（1896（明治29）年）

林甕臣^{みかおみ}・棚橋一郎編『日本新辞林』（1897（明治30）年）

落合直文『日本大辞典 ことばの泉』（1898（明治31）年）

これについては最初の『日本辞書 言海』における項目の選定が以後の辞書の編集に影響を与えたという可能性も考えられるが、いずれにせよ辞書が現実の言語を反映するには時間を要することを示す一例である。国語辞典に「設計」が載るようになったのは20世紀に入ってからであった。

せつ-けい〔設計〕（名）或物をこしらへまうくるに就きての計画。つもり。もくろみ。
 ——-しよ〔設計書〕（名）設計の次第をしたゝめたる文書。つもりがき。もくろみが
 き。（金沢庄三郎編『辞林』、1907（明治40）年）³⁹

せつ-けい（設計）名 計画ヲ設ケ立テルコト。＝しくみヲ工風スルコト。＝もくろみヲ
 タテルコト（オモニ建築土木ナドニ云フ語）。

（山田美妙『大辞典』上巻、1912（大正1）年）

いずれの語釈においても、計画ないし計画を立てることが語義の中心とされ、「つもり」「もくろみ」などが類義語として示されているところは現代の語感に一致しない。実際、今では「設計」が次のような文脈で使われることはないであろう。

山口県ニ於テハ、長崎県^{（コレラ）}虎列刺倍々伝播ノ兆アルニ依り、新港、柳井、室津、徳山、三
 田尻等ノ各港及本県沿海各地ニ於テ充分取締ヲ為スコトニ設計セリ。

（「虎列刺予防取締設計」、『官報』1890（明治23）年7月10日）

ところで、19世紀の「設計」の用例を見て少々奇妙に感じられる事実がある。それは、現代の感覚で言えば「設計」は連想的に建物の建築や機械の製造に強く結び付いているが、調査で確認できた限りでは、それらの文脈における「設計」の使用の普及は遅いという印象があることである。建築関係の最も早い事例は上に掲げた1887（明治20）年の『読売新聞』の広告であり、1890（明治23）年の多田房之輔『新撰実用学校管理法』にも「校舎ノ設計」「敷地ノ設計」などの表現が見られるが、その時期にはまだ用例が少ない。

日本建築学会の前身である造家学会の機関誌『建築雑誌』における初出は、筆者の粗い確認によればさらに遅い1894（明治27）年の次の2件の記事で、しかも、いずれも新聞記事の転載である。

「建築設計書々式（横浜貿易新聞）」、『建築雑誌』第87号、1894（明治27）年

「平安宮建築設計并に工費（毎日新聞）」、『建築雑誌』第87号、1894（明治27）年

また、同誌に掲載された建築物の図面や写真において設計者名の表示に「設計」が使われるようになったのは、筆者の見落としがなければ『建築雑誌』第111号（1896（明治29）年）に掲載された「奈良県庁之図」からであり、そこには「工学士 長野^{（うへいじ）}平治設計」と書かれ

³⁹ 惣郷・飛田編（1986）に「明44」と書かれているのは「第四版」の「四十四年版」の出版年である。

ている。それまでは、設計者名は「英国建築学士ゼー、コンダー氏計画」(「新海軍省建築図」、『建築雑誌』第95号、1894(明治27)年)、「計画及監督者 ^(つま き よりなか) 妻木頼黄」(「臨時帝国仮議院二百分壺地絵面」、『建築雑誌』第107号、1895(明治28)年)などのように「計画」を使って記されていた。建築の専門家は「設計」の語が社会に普及するまでの時期には学術的な文脈におけるその使用を敬遠していたということのようにも感じられる。

機械関係の文脈となると、「設計」の普及が遅いだけでなく、用例頻度も低い。確認できた比較的早い例は次のようなものである。

而シテ機關車ヲ設計スルニ当リテハ、深ク之ニ用ユル炭薪ノ種類ニ就テ思考セザルベカラズ。
(二見鏡三郎編『土木工学 鉄道編』、1889(明治22)年)

英国の注文に由りて先つ機械を設計せられ、且つ随て搾油事業を開始せられたり。
(「牛莊港(營口港)貿易及び満洲貿易一斑」、『東邦協会々報』第9号、1895(明治28)年)

以上のようなことを考えれば、「設計」はやはりまず社会基盤整備のための土木工事などに関わる分野で普及し、その後建物の建築の文脈で多く使われるようになり、また機械の製造の文脈にも広まったと言えそうである。そしてそれは、「設計」の意味の重点が、難度の高い大規模な社会事業の実現の方策を考え出すということから、作成する個別の事物の構造や形状を考案、工夫するということに移っていったことを意味しているのではないかと考えられる。

「設計」が「制度を設計する」や「人生を設計する」のように抽象物の計画について使われるのは比喩的な意味拡張の結果であるが、これについても社会全体に関わるようなことがらの文脈において先に生じたと考えられる。次のような表現の例は19世紀から見られる。

立法ニモ行政ニモ関セス、國家全体ノ体制ニ関スル設計ヲ定ムルハ之ヲ一局部ノ職權内ニ置クラ得ス。
(有賀長雄『帝国憲法講義』、1898(明治31)年)

これに対し、「人生」「生涯」「生活」といった個人に関わることを対象として「設計」が使われるようになったのは調査の限りでは1920年代ごろからである。

4.3 原語の問題再論

先に述べた通り、「設計」は西洋の言語の翻訳上の必要に基づいて作り出された語である可能性がある。ただ、残念なことに明治初年の翻訳文書はその原文が残っておらず、対訳の関係を確かめることができなかった。

しかし、「設計」を含むある明治中葉の翻訳文書については原文が残っている。それはオランダ人技師ヨハニス・デ・レーケ（Johannis de Rijke）が内務省土木局長古市公威^{こうい}に提出した淀川と大和川の改修に関する英文の復命書 *With reports concerning the Yodogawa and the Yamatogawa* であり、1890（明治23）年6月に書かれた2通の文書から成る——復命書が英語で書かれているのは、この時期にはオランダ語を解する日本人が少なくなっていたということであろう⁴⁰——。それが、当時の2種類の日本語の翻訳とともに国土交通省淀川資料館に保存されている。翻訳の1つは「淀川及大和川検査復命書」と題され、第四区土木監督署の罫紙に書かれている。もう1つは「淀川並大和川検査報告書」と題され、内務省の罫紙に書かれている。ここではそれぞれを「翻訳1」「翻訳2」と呼ぶ。翻訳1の訳者は不明、翻訳2の訳者は宮原直堯^{なおたか}である。以下の考察には淀川近代改修の曙研究会（1997）に収められた当の復命書と翻訳の翻字を利用した。ただし、「設計」に関わる箇所については淀川資料館所蔵の原本と照合し、翻字の不備を1か所訂正したうえで分析の資料とした。

2つの翻訳に「設計」は合わせて8度現れる——うち2か所では誤って「説計」と書かれている——。従来の研究は異口同音に「設計」を英語の design の訳語だとしてきたが、ここでの対訳関係はどのようなものだったであろうか。復命書の原文と2つの翻訳を対照して調べてみたところ、8件の「設計」のうち、原文の plan を訳したものが4件⁴¹、scheme を訳したものが1件⁴²、原文に直接対応する語のないものが3件であった。すなわち、design を訳して「設計」としたものはこの復命書の翻訳には1件もなかった。翻訳ごとの内訳を表1に示す。

表1 デ・レーケの復命書の翻訳における「設計」の原語

	「設計」の件数		
	翻訳1	翻訳2	計
planを訳したもの	2	2	4
schemeを訳したもの	1	0	1
原文に直接対応する語のないもの	2	1	3
計	5	3	8

plan ないし scheme が「設計」と訳されたくだりを各翻訳につき2件ずつ原文とともに示せば次の通りである。

40 明治初期にあっても、オランダ人が例外的に英語やフランス語を用いて書いた短い文書はある。

41 “This is the reason that I decided on a river plan as proposed, by which ...” という原文で plan が「計画」と訳され、which が「其設計」と訳されている例1件を含む。

42 本文で間もなく文例を掲げる通り、scheme は実際には harbourscheme という形で書かれている。harbourscheme や後出の riverplan などの長い複合語の記法は書き手がオランダ人であることによるものであり、ここでは英語の一般的な記法に従って harbour scheme、river plan と解釈する。

原文：I can not, of course, commence to work out a plan as above without having first the necessary surveys ...

翻訳1：計画ニ必要ナル測量ヲナサ、ルガ故ニ其設計ニ着手スルヲ得ス。

原文：To work out properly such a harboursscheme, new surveys will be necessary.

翻訳1：夫レスノ如キ築港説計^(ママ)ヲナスニハ新ニ測量スヘキハ必要ノコトナリ（後略）

原文：The answer is that the plan which I made for the Central Government years ago, which is now nearly executed, was only to ...

翻訳2：請フ答弁セン。既ニ多年前我カ中央政府ノ為ニ立テタル工事設計（今ハ已ニ竣工ニ近キモノ）ハ只タ（中略）ノ目的ニ出テタルノミ。

原文：For such a diversion of the mouth a special plan would be required.

翻訳2：夫レスクノ如キ川口転他⁴³ハ別ニ之カ設計ヲ要ス。

原文に直接対応する語のない「設計」という翻訳3件のうち2件については、原文の直近の文脈に plan があり、実質上それを訳したものと見なすこともできる。⁴⁴

逆に、原文における plan と scheme がどのように訳されているかについても確かめてみたところ、表2の通りであった。復命書中に現れる plan と scheme はいずれもすべて名詞である。ここでも plan に riverplan などの複合語を含め、「計画」に「計画案」「改修計画」などの複合語を含めるなどしている。

2人の翻訳者はいずれも1つの原語に常に同一の訳語を与えるのではなく、場合によって異なる形に訳し分けていることが分かる。

復命書に design は動詞として2度現れる。1つは“design a new plan”という言い回しにおいてであり、2種類の翻訳でそれぞれ「計画ヲナス」「計画ヲ立ツル」と訳されている。もう1つは“I designed a Sketchplan”においてであり、「簡略ナル計画ヲナシ」「大略計画図ヲ作レリ」と訳されている。上述の通り、design の翻訳に「設計」を使った例はない。

当の復命書と翻訳は「設計」の語の使用開始から少なくとも20年近く経過した時期のものであり、「設計」がどの言語のどのような表現の訳語として使われ始めたのかという問題

⁴³「転他」は一般的な表現ではないが、原文の“a diversion of the mouth”を訳した「川口転他」は河口を“他に転ず”、すなわち、別の場所に移すということであろう。

⁴⁴ 原文に直接対応する語がないもの3件のうち残る1件は次の通りである。

原文：It is now over 15 years ago since I proposed this in a report dated Oct. 1874 on river improvements.

翻訳1：抑此計画タル一千八百七十四年十月ノ復命書ニ記セルモノニシテ、今ヲ去ル十五年前大坂府下河川改修ノ設計ヲナシタルノ時ヲ以テ企画シタルモノナリ。

原文に plan などの語はなく、翻訳1の「設計」は原文の複文構造を調整して分かりやすい訳文にするために加えられたものであろう。

表2 デ・レーケの復命書中の原語の訳し分け

	翻訳における表現	各翻訳表現の件数		
		翻訳1	翻訳2	計
plan (44件)	設計	1	2	3
	計画	29	39	68
	企画	1	0	1
	企	1	0	1
	(～する)法	2	1	3
	説明訳(「改修」)他	6	0	6
scheme (2件)	訳出せず	4	2	6
	設計	1	0	1
	計画	0	2	2
	説明訳(「改修」)	1	0	1

の解明には直接役立たない。しかし、「設計」の現れる明治初年の翻訳は確認の限りにおいて原文がオランダ語であったと見られることに加え、ここで確かめた複雑な対訳関係を考えれば、少なくとも「設計」が英語の design の訳語として始まった可能性は低いと言ってよいであろう。

4.4 中国への伝播、普及と展開

明治初年の日本で名詞として一語化して普及した新しい「設計」は19世紀末以後の中国語にも見られるようになる。

筆者の調査と判断によれば、その最も早い出現例は1897（光緒23）年に『実学報』に載った次の翻訳記事である——それより10年以上前の時期に処理に困る孤立的な事例があることについては後述する——。もとの日本の新聞記事も併せて示す。翻訳者はもとの記事を正確に読めておらず、原文と翻訳が内容上かなり食い違っている。

而全川之改図、雖費用為十分浩大、要可設計籌画、今就其地勢而治之、則第一部⁴⁵即三十九里余要当以此為急也。（川全体の改良は非常に多額の費用を要するが、もし計画が可能であれば、今はその地勢に応じて処置する。第1の部分すなわち39里余りの改良を急務とすべきである。）

（「石狩川疏濬工事」、『実学報』第9冊、1897（光緒23）年）
而して全川の改良を為さんとせば莫大の費用と十分なる設計を要す可きは勿論なれば其は序を追ふて之を為すとすも、其一部即ち三十九里余（上、神威古潭より下、江別太に至るの間）は甚だ急なるを要するなり。

（「石狩川浚渫及び枕木取除工事」、『東京日々新聞』9月16日、1897（明治30）年）

45 この「第一部」は日本語記事の「其一部」に対応する。翻訳もしくは印刷の過程で生じた誤りであろう。

日本語の記事で単に「設計」と書いているところを、翻訳記事では「設計籌画」と訳している。韻律の調整という動機もあったかも知れないが、原文の通りに「設計」とだけ書いたのでは文意が正しく伝わらない恐れがあるという判断に基づいて、言い換えによる説明を加えたのではないかと考えられる。

同年の『実学報』の別の号に載った次の翻訳記事は「設計」という漢字連接を含んでいないが、これも観察に値する。

設此計者^(クルップ)為苦路之普⁴⁶氏、已向德帝説明用法。苟将此器施於敵人之前，無論敵人有各種砲兵攻撃，至是亦全歸無用。（これを考案したのはクルップ氏で、すでにドイツ皇帝に用法を説明した。この兵器を敵前に展開すれば、敵がいかなる砲撃を行おうと完全に無用に帰する。）

（「^(ドイツ)德国之新兵器」、『実学報』第12冊、1897（光緒23）年）

設計者たるクルップ氏の独帝に説明せる所に抛れば、一度戦闘線破壊器にして敵前に現出せんか砲兵の攻撃は全く無用に帰し従来^{ひとたび}の勢を失ふに至らんと云ふ。

（「独逸の新兵器」、『時事新報』9月22日、1897（明治30）年）

原文の「設計者」が「設此計者」、「この計を設けた者」と訳されている。日本語の「設計」は一語化しており、2字のあいだに別の要素を挿入することはできないが、翻訳者は旧来の動詞句の感覚で受け止め、必要を感じて「此」を加えたのであろう。

以上の2件の翻訳記事に見る「設計」への字句の補充は、中国人が日本語の新しい「設計」をそのまま使うことには抵抗を覚えたこと、そして、それでも漢字表記の日本語表現を利用して翻訳しようとしたことを物語っている。

次は日本の雑誌記事の見出しの翻訳における例である。原文、翻訳とも記事の本文中には「設計」は現れない。

「製茶輸出^(シベリア)西比利亞之設計」 （『農学報』58、1899（光緒25）年）

「西比利亞地方へ製茶直輸の設計」 （『大日本農会報』第202号、1898（明治31）年）

翻訳された見出しを日本語の原題の直訳と考えると中国語として語順が異常である。これはおそらく、翻訳者がここでの日本語の「製茶」が「吐血」や「化石」と同類の「茶」を主要部とする日本語に特有の派生的な用法（2.2）であることを知らず、それを中国語の感覚

46「苦路之普」は日本語記事中の「クルップ」という仮名表記の人名を文字単位で漢字転写したものである。ここで言うクルップは近代世界の武器製造界の頂点に立っていた企業の創業者であるフリードリッヒ・カール・クルップ（Friedrich Carl Krupp）である。

によって本来的な“茶を製する”という意味の動詞句として受け止めた結果であろう。すなわち、“製造した茶をシベリア地方に直接輸出する計画”を表す原題を“茶を製造してシベリアに輸出する計画”という意味に解したということである。このように日本語の文章が必ずしも正確に理解されることなく大量に中国語に翻訳された当時の状況の中で「設計」の語は他の多数の語とともに中国語に流入したことになる。

蔣（2004）は、「近代漢語新詞」（近代中国語新語）としての「設計」が1896（光緒22）年の『清議報』第7冊に現れるとする——上の『実学报』の記事2件よりも1年早い——。多数の新語の使用開始時期に関する調査の結果を列挙した表にその旨が記されているだけで、記事名や出現の文脈などの情報は示されていないのであるが、おそらく次の記事のことだと思われる——筆者が『清議報』第7冊中に「設計」という漢字連接を見出せたのはこの記事だけである——。

^{（フランス）}
我法国以鉄彈擊之【＝中国堅木帆船（引用者注）】，尚不能穿透直入。水師提督孤拔乃設計用砲向上，使砲彈落入中国堅木船中，方燒毀之。（我がフランス軍は中国の木造帆船に対して鉄製の砲弾を撃ったが、船体を貫通させることができなかった。そこで海軍司令官が独自に策を練り、砲弾を上向きに発射して中国船中に落とし、船を全焼させることができた。）

（郭家驥訳「法文報訳 武官論砲弾」、『時務報』第7冊、1896（光緒22）年）

蔣は表の備考欄に「非指計謀」（策略、謀略を表していない）と記しているが、“策を練り、砲身の角度を変えて撃って中国船を焼き払った”という話なのであるから、この用例に含まれる「設計」はまさに策略や謀略を語るのに多く使われる旧来の動詞句にはかならない。日本語で一語化された新しい「設計」は工作物の築造や製作に代表されるような建設的、創造的な行為を言うのに使われるのであり、大砲の打ち方を工夫して敵船を撃破するといった破壊的な行為は表さない。

「設計」年表に見る通り、中国語における新しい「設計」の初期の出現——特に、1897（光緒23）年から20世紀初頭にかけての約10年間のそれ——は日本の報道記事の翻訳や日本語の影響の要素の多い雑誌類に集中している。そしてその後、日本との直接的な関係の認められない文脈においても「設計」は現れるようになる。

ただし、「設計」という漢字連接を独立した述語として用いたり、別の動詞句の前に置いて連用修飾句として用いたりしている場合には、それはまだ「設+計」という動詞句にとどまっていると見なすこともできる。例えば、

近来朝鮮之電線鉄道各有成局，漸有經營海防之事。其設計築要塞于全国沿岸之要処……海

岸建設砲台、防備海口。(最近朝鮮では電線と鉄道の敷設が進み、今や海防が問題となってきた。朝鮮は港の防御のために全国沿岸の要所に要塞を築き、海岸に砲台を建設することを計画している。)

(「外国近事 朝鮮海防之設計」、『清議報』第78冊、光緒27(1901)年3月21日)
日本某日報云、有客婦自黑竜江、述及俄人近派警備武員、要結蒙古王公、設計安設鐵道、并在哈爾濱開設學堂四所。(日本のある日刊紙によれば、黒竜江省から帰国した人が、ロシア人は最近警備軍人を派遣し、モンゴルの王公と手を組んで鉄道を設置し、ハルビンに学校4校を開設する計画を立てようとしていると語ったとのことである。)

(「^(ロシア)俄管蒙地」、『申報』1902(光緒28)年8月18日)

のような例における「設計築要塞」「設計安設鐵道」を“計を設けて要塞を築く”、“計を設けて鉄道を敷設する”と理解すれば、その「設計」は旧来の「設計」と必ずしも本質的に異なるわけではない。

早い時期から「公衆衛生之設計」「杭広海岸線之設計」(杭州・広東沿岸鉄道の計画)や「工場設計」「市街設計」などの言い回しは多く見られ、それらにおいては「設計」はもはや動詞句ではなく、すでに一語化していると考えるのが自然である。そして、やや遅れて1910(宣統2)年ごろになると、次のように「設計」に目的語を後接させた言い回しも見られ始める。

学堂建築須為各省設計數種圖式、任人択倣、以便管理教授而適衛生為主。(学校の建築については、各省のために数種類の様式を設計し、管理と教育に便利で衛生に適したものを選択、模倣できるようにする必要がある。)

(「学部答覆羅議員質問教育説帖(二)(続)」、『申報』1910(宣統2)年12月25日)
設計電機時所用数学公式率皆近似之值、不可拘泥一端、必時有變動、而以平時所得經驗之結果、以定其變易之範圍、方可達最善之目的。(電氣機械を設計するときに使う数学公式は概して近似の値である。固定不変ではなく、常に調整される。ふだんの経験から得られた結果に基づいて数値の範囲を調整して初めて最良の目的を達成することができる。)

(李燮綸^{しょうりん}編「設計電機所用曲線之解釈」、『電界』第7期、1917(民国6)年)

この第2の記事には原文が『電世界』に所載の記事であるとの表示があるが、当時の日本に『電世界』という雑誌はなく、『電気世界』や『電業世界』などの雑誌を確かめても原文と思しき記事が見当たらなかった。そこで欧米の雑誌にも目を向けて調べてみたところ、『電世界』は米国の雑誌 *Electrical World* のことで、上の翻訳の原文は次の通りであることが分かった——翻訳では原文の一部が省略、調整されている——。英語の翻訳における「設計」の使用は確認の範囲ではこの例が最も早い。

Design of electrical apparatus is an art more than it is a science, since mathematical formulas are used chiefly for approximating purposes, the final result usually being altered according to the judgment of the designer to take advantage of past experience or meet certain construction requirements. (電気機械の設計は1つの科学というよりも1つの技術である。⁴⁷ と言うのは、数式は主に近似の目的に使われ、最終的には設計者の判断によって、過去の経験を生かしたり製作上の要請を満たしたりするために調整されるからである。)

(Theo. Schou “Analysis of design-constant curves”,
Electrical World, Vol. 70, No. 3, 1917)

上掲の記事中の「設計数種図式」（数種類の様式を設計する）や「設計電機」（電気機械を設計する）という言い回しに見るように、本来動詞句であった「設計」という漢字連接が、独立した目的語を取り得る1つの他動詞——日本語に関して使った表現によれば、拡張的な文型で使える動詞——にもなった。これにより、中国語において、名詞と動詞という2つの品詞として機能する現代的な「設計」の語が完成したとすることができる。

中国語において「設計」は日本語と同じく土木、建築、機械などの文脈での使用のほか、調査した期間の範囲では「塩務改革」にも適用され、『申報』1912（民国1）年1月1号に掲載された張謇「改革全国塩法意見書（続）」には「製塩設計」「運塩設計」「銷塩設計」（塩の製造、運搬、販売の計画）などの表現が使われている。その後、Fujita（2016）の記述にあるように、1920年ごろには米国で提唱された教育法である project method が「設計教学（教育、教授）法」と訳され、現在では「服装設計」「美術設計」「芸術設計」などの表現も広く使われるようになっている。

日本語では衣服や美術については「設計」より「デザイン」などの語が多く使われるが、インターネットで探してみれば「洋服を設計する」や「（舞台、映画）美術を設計する」という言い回しはそれなりに見つかる。過去にも「一般商業美術の設計並に施工」（「新興建築家聯盟」の規約、『新興建築家聯盟報告』第1号、1930（昭和5）年⁴⁸）のような例を見出すことができる。とすれば、中国語における「美術設計」などの表現が日本語の影響によるものである可能性も考えられなくはない。しかし、日本語における用例頻度の低さから考えて、その可能性は低いと思われる。

また、中国語では「設計」の旧来の用法が今も残っているが、新しい一語化した「設計」の普及によって相対的に目立ちにくい存在になった。「申報数拠庫」を用いた粗い確認によ

47 これは欧州で古くから言われていた science 対 art という二項対立の考え（拙論（2016））を背景とした言明だと見られる。

48 確認は稲垣（1959）における引用による。

れば、1910 年ごろまではまだ「設計」という漢字連接の出現の多くが旧用法であったが、その後新用法の比率が徐々に増え、1920 年代後半には新用法が大半を占めるようになった。とすれば、新義の陰に隠れる形になった旧義がその後どのように表されるようになったのかという疑問が生じる。しかし、「設計」に取って代わった別の表現があるようにも見えないので、おそらく表現が交替したのではなく、新聞報道のような文脈では“計を設ける”という類の意味の表現をあまりしなくなったということであろう。

4.5 問題として残る中国語の事例

最後に、これまで述べてきた「設計」の近現代語史に関する理解にとって問題となり得る、中国語における 1885（光緒 11）年の用例の存在に触れておく。

伊犁鎮總兵劉宏發申稱，查伊犁軍台、^(イリ)卡倫均經從新復設計，南北兩路照原額設立軍台十三座，西北界設立卡倫三十二座，統計台卡四十五處。^(カルン)（イリ鎮の總兵官劉宏の報告によれば、イリの軍台、卡倫を調査したところいずれも新たに設計し直されており、南北兩路は当初の計画通りに軍台 13 所、西北界に卡倫 32 所を設立し、合わせて 45 か所だという。）

（「光緒十一年二月十六日京報全錄 金順片」⁴⁹、『申報』1885（光緒 11）年 4 月 11 日）

前節（4.4）では、中国語における新しい「設計」の使用開始と急速な普及が日本語の影響による現象であったとの見方を述べた。そして、確認できた最初の出現は 1897（光緒 23）年の『実学報』に載った翻訳記事「石狩川疏濬工事」におけるものであるとした。しかし、上の用例の「軍台、卡倫均經從新復設計」というくだりは“軍台、卡倫がいずれも新たに設計し直された”ということであろうから——「軍台」と「卡倫」はいずれも主要な道路に沿って設置された軍用の施設で、前者は主に軍事文書の伝達を担う通信駅、後者は防衛や警備、通信を担う哨所を言う（潘（1996））——、この「設計」は動詞としての新しい用法と考えることができるように思われる。

この 1885 年の用例がその 10 年以上後に始まる新しい「設計」の急速な普及の様相からかけ離れ、孤立した形で存在するという事実は何を意味しているのか。考え得る解釈はいくつかあり、ことによっては前節で述べた見方を再考する必要性が生じる可能性もある。しかし、上の例しか確認できていない現状では想像を語る以上のことはできない。この問題に解決を

⁴⁹ 引用元の『京報』は参照できていない。「金順片」の「金順」はイリ將軍に任命された軍人の名である。「片」は一片の紙に書かれた短い報告ということであろう。Fairbank and Têng (1940) は清代の文書の種類について述べた節において、意味の比較的明確な「奏片」「附片」「夾片」と異なり単字の「片」は正確な意味の特定がむずかしいと述べている。

与えるには、まず 19 世紀の中国語における「設計」の使用状況をさらに詳細に明らかにすることが必要である。

5 おわりに

日本語の 2 字漢語には伝統的な中国語を基準として見れば特異とも言うべき文法的性質を有しているものが多く、それが 19 世紀末以後には中国語に影響を与えた。そのような観点の可能性を述べ、一事例として近代日本語における「設計」という語の成立と展開およびそれが中国語に与えた影響の過程について考察した。

中国語研究の文脈では、王（1945）以来、西洋の言語の影響によって生じたと考えられる文法事象が「欧化（的）語法」として論じられてきた（2.3）。そして、日本語の影響によって生じたと見られる事象はそれにならって「日化」と形容されることがある。ここで「設計」を例にその歴史を確かめた現代中国語の表現上の特徴も「日化語法」の様相を呈している。本来「設+計」という動詞句であったものを日本語にならって 1 つの語とし、他動詞として目的語を取れるようにしたからである。そして、その一語化した「設計」は日本語において中国語の動詞句に基づいて作り出され、性質を改められたものであった。したがって、これは日中語彙交流の事例であると同時に、双方向の日中_二文法交流の事例でもあると言うことができる。実際、現代中国語において日本語にはない語にも同様の特徴が見られるのは影響が個別的な語の借用にとどまらず、それを誘因として「動詞+名詞」という表現型自体の文法的性質に変化が生じたということではないかとも考えられる。

論述においては不十分な証拠に基づく推定に頼らざるを得なかった局面が少なくない。中国語の知識の不足による不備もあると思われる。補足や訂正の余地が多いことは避けられないが、筆者の考えたところを一通り述べてみた。

文献

- 荒川清秀（1997）『近代日中学術用語の形成と伝播—地理学用語を中心に—』（白帝社）
荒川清秀（2018）『日中漢語の生成と交流・受容—漢語語基の意味と造語力—』（白帝社）
稲垣栄三（1959）『日本の近代建築—その成立過程—』（丸善）
今鷹真・井波律子訳（1977）『世界古典文学全集 第 24 卷 A 三国志 I』（筑摩書房）
斎藤静（1958）「近代日本語の語源」『言語研究』第 33 号
佐久間吉也（1964）「晋代の水利について」『福島大学学芸学部論集』第 16 号
朱京偉（2003）『近代日中新語の創出と交流—人文科学と自然科学の専門語を中心に—』（白帝社）
沈国威（1990）「[V+N] 構造の二字漢語名詞について—動詞語基による装定の問題を中心に、言語交

渉の視点から—」『国語学』第160集

沈国威（1994）『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容—』（笠間書院）

沈国威（2017）「中国語語彙体系の近代化問題—二字語化現象と日本語の影響作用を中心として—」内

田慶市編『周縁アプローチによる東西言語文化接触の研究とアーカイブスの構築』（ユニウス）

惣郷正明・飛田良文編（1986）『明治のことは辞典』（東京堂出版）

田野村忠温（2001）「サ変動詞の活用のかたちについて—電子資料に基づく分析—」『日本語科学』9（国立国語研究所）

田野村忠温（2016）「『科学』の語史—漸次的・段階的変貌と普及の様相—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第56巻

田野村忠温（2017）「近現代語『可能』の成立—日中両語間の双方向的影響—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第57巻

田野村忠温（2020）「漢語複合名詞の形成と再分析—動詞-名詞型複合名詞の二義性—」『現代日本語研究』第12号（大阪大学大学院文学研究科日本語学講座現代日本語学研究室）

田野村忠温（2021）「『化石』の成立と展開」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 四十』（和泉書院）

陳力衛（2001）『和製漢語の形成とその展開』（汲古書院）

陳力衛（2019a）『近代知の翻訳と伝播—漢語を媒介に—』（三省堂）

葉賀七三男（1985）「『工学叢誌・工学会誌』について」『技術と文明』1巻1号（日本産業技術史学会）

馮珮（2022）「『反応』の語誌」（大阪大学大学院文学研究科修士論文）

淀川近代改修の曙研究会（1997）『淀川オランダ技師文書（欧文関連編）』（建設省近畿地方建設局淀川工事事務所）

淀川百年史編集委員会編（1974）『淀川百年史』（建設省近畿地方建設局）

李瑤（2019）「中国語動詞の文法機能における日本語からの影響—動詞目的語型他動詞を例として—」『歴史文化社会論講座紀要』第16号（京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座）

陳力衛（2019b）『东往东来：近代中日之间的语词概念』（社会科学文献出版社）

董秀芳（2002）『詞彙化：漢語雙音詞的衍生和發展』（四川民族出版社）

董秀芳（2011）『词汇化：汉语双音词的衍生和发展』修订本（商务印书馆）

蔣英豪（2004）「梁啟超與近代漢語新詞」『中國文化研究所學報』第44期（香港中文大學中國文化研究所）

近现代汉语新词词源词典编辑委员会编（2001）『近现代汉语新词词源词典』（汉语大词典出版社）

潘志平（1996）「清代新疆的交通和邮传」『中国边疆史地研究』1996年第2期（中国社会科学院中国边疆研究所）

沈国威（2010）『近代中日词汇交流研究：汉字新词的创制、容受与共享』（中华书局）

沈国威编著（2019）『汉语近代二字词研究—语言接触与汉语的近代演化』（华东师范大学出版社）

王力（1945）『中國語法理論』下册（商務印書館）

朱京伟（2020）『近代中日词汇交流的轨迹：清末报纸中的日语借词』（商务印书馆）

庄钦永・周清海（2010）『基督教传教士与近现代汉语新词』（新加坡：新加坡青年书局）

Fairbank, John King and Ssu-yü Têng (1940) 'On the types and uses of Ch'ing documents', *Harvard Journal of Asiatic Studies*, Vol. 5, No. 1. Cambridge, MA: Harvard-Yenching Institute.

Fujita, Haruhiko(2016) 'Birth of an Asian Design: Origins of the Chinese word *sheji* and its relationship with the Japanese word *sekkei*', Wendy Siuyi Wong, Yuko Kikuchi and Tingyi S. Lin (eds.) *Making Trans/National Contemporary Design History*. São Paulo: Blucher.

「設計」年表

(A) 日本語

	資料名	出現文脈
1778(安永7)	[吉田一保 和漢書要覧]	毛宝計(ハカリコト)ヲ設ケテ蘇峻ガ兵糧ヲ奪ヒ
1813(文化10)	[山村良由 木曾宣公旧里碑]	因与密議設計新建八幡祠]
1845(弘化2)	[為永春水 訂正補絵本漢楚軍談2]	張良は種々の計(けい)を設け大将漢嬰を洛陽の都へ嚮に指向て一挙に城を攻取りたれば]
19世紀中葉	[藉珀子著 練卒訓語1]	設計鼠(セキチー)ハハ禄多ヨリ成ル(蘭語sectieの音訳)
1862(文久2)	[堀達之助編 英和对訳袖珍辞書]	attempt 企, 試 / design 雛形, 目的, 企 / plan 雛形, 企 / plot 盟通例謀反又外ノ悪事ニ用ユ]
1872(明治5)	[吉田賢輔 英和字典]	design 企タテル, 指示ス○計謀, 設計 / ensnare 罾ニカケル○設計 害人, 誘人圈套 / speculator 考へル人, ヤマ師, 目論見スル人○推理者, 図謀者, 徹底的, 設計者]
1873(明治6)	小野義真 土木寮伺(「淀川修治ノ儀ニ付伺」に添付) [柴田昌吉・子安峻 附音挿図英和字彙]	先測量ヲ遂ケ次テ工事ノ設計ヲ為シ直ニ実地ニ施スハ【初出】 attempt 試看, 設計(クワダテ), 勉強]
1874(明治7)	工部省製作寮官繕課処務規定 淀川改築事務章程 ファン・ドールン 熱海貞爾訳 横浜大船泊所ノ議 ファン・ドールン 水道ノ件 ファン・ドールン 平野重彰訳 淀川改修之按文 林友幸 刀根川修築之儀ニ付再伺 [南郷茂光訳 万国海上信号書]	課中ノ事務ヲ分ツテ設計製図督役監材ノ四科ヲ設ク 蘭工師両氏ノ設計ヲ調査シ 只我考按ニ抛リ泊所ヲ造築スヘキ良方ノ設計ヲ挙クルニ止ルミ[/ 〜ノ費ヲ比較ス可キ為我二個ノ計ヲ設ク] 水道ノ設計充分ナル者ヲ府ニ出シテ制可ヲ乞フヘクノ東京ノ為定 セル設計ヲ為スニ至リテハ 此設計ハ其積少シク不廉価ナリ 先ツ測量ヲ遂ケ尋テ工事ノ設計ヲ為シ直ニ実地ニ施スハ 我レ設計(クワダテ)ヲ行フト雖モ其功無カリシノ我レ——ヲ設計ツ可 シノ百方設計ヲ為セリ]
1875(明治8)	ファン・ドールン 熱海貞爾訳 東京水道	城内ノ常用ニ給スルノ水ハ此設計ノ算ニ加ヘスノ此設計ニ撰ム処ノ 濾器
1877(明治10)	ファン・ドールン 平野重彰訳 水戸運河ノ件 ファン・ドールン 平野重彰訳 吉田用水溝ノ件 ファン・ドールン 平野重彰訳 溝漕ヲ以テ北上川ヲ 海ニ連絡セシムルノ件	余ガ目撃スル設計ニ拠レバノ余ヲシテ水戸ニ再行セシメ, 以テ確実 ナル運河ノ設計ヲ立ツルコトヲ命ズベシ 後日如何ナル設計ノ亦続出スルモノ余ハ貴下ノ委託ヲ受ケ全工事 ヲ成果スベキノ設計ヲ作ルベキ事ヲ快活トス 設計ノ概記ノ設計施行ノ日突堤及ヒ水堰ノ築石ヲ運輸スルノ便路ト ナル
1879(明治12)	デ・レーケ 平野重彰訳 四日市港ノ件 [津田仙・柳沢信大・大井鎌吉訳 英華和訳字典※]	其設計ノ如キハ實際ニ就テ之レヲ為サンコトヲ要ス contrive 設計, 設謀, 作計, ハカリゴトヲマウケル, クワウヲスル / devise a plan 設計, 設法, ハカリゴトヲマウケル / plot 謀, 設計, 設謀, 図謀, 作計, 構, ハカル, クハダテル, モクロムノ他]
1880(明治13)	石井省一郎 築港に関する東京府知事あて回答 石井省一郎 長工師ファン・ドールン氏履歴書 原口要 水道改正設計書修正意見 デ・レーケ 橋林高之訳 耕地及ヒ流砂除害ノ方法 工学叢誌(工学会員頒布)2 杉山輯吉 日本鉄道ノ由 来及ヒ概況	佃島護船場設計之儀ハ 其設計スル所枚挙ニ遑アラズノ独り惜ム氏ノ設計甚タ多ク而シテ其 挙工ニ至ル者甚少キヲ【「設計する」初出】 該設計ノ大旨ノ斯クノ如キ設計ヲ為スニ当リテハ 今該河ニ起工ノ企アリテ其設計ヲ拙者ニ命セラレタレハ 現今着手シタル線路ハ總テ同氏ノ設計シタルモノニシテ
1881(明治14)	工学叢誌(工学会員頒布)6 杉山輯吉 野蒜築港之記 [永峰秀樹訓訳 華英字典]	野蒜ニ築港スルコトヲ設計シテ最上ノ策トナセリノ後來ノ成果ヲ要セ ントスルノ設計ナリ plan 設計○画策(モクロム), 想(オモフ), 描画(エガク)]
1882(明治15)	工学叢誌10 桑原政 釜石鉱山景況報告 柴田昌吉・子安峻 増補訂正英和字彙	諸事権衡ヲ失シタル設計 attempt 試看, 設計, 勉強 / design 画ク, 摸ス, 設計スル, 画策ス ル, 図ル, 外形ヲ画ク, 企ツル, 想フ, 意匠スル / plot 謀反スル, 徒 党スル, 設計スル / project 設計, 計策, 画図ノ他
1883(明治16)	工学叢誌16 杉山輯吉 水田灌溉 工学叢誌21 遠邑容吉 貞山堀鑿開ノ設計	其設計ノ迂ナルコト実ニ嘆スベキコトナリノ其設計ニ物理学ノ利ヲ応 用スルノ設計ヲ緻密ニ点検シテ 設計ニ必要ナル地方平面図及ヒ縦横断面図ヲ製シノ余カ設計ノアル 所ヲ繰述セント欲スノ設計者
1884(明治17)	東京府知事 市区改正意見草案	道路橋梁及河川ノ設計ヲ定ムル時
1885(明治18)	工学会誌45 雑記 利根川橋梁 工学協会報告2 英海峽ニ架橋ノ設計 [柴田昌吉・子安峻 附音図解英和字彙]	両氏ノ設計ニ係ル利根川橋梁 英海峽ニ横架スル橋梁設計ノ議論ノ此設計ヲ賛成スルモノハ plot 謀反スル, 徒党スル, 設計(クワダテル)]
1886(明治19)	[野村竜太郎・下山秀久編 工学字彙]	design 計画]
1887(明治20)	官報6/25 鉄道局財政報告 読売新聞10/9 帝国工業会社の広告	工事設計ノ大体ハ猶之ヲ外国工師ニ諮詢スルモ 和洋建築物の計画, 設計

1888(明治21)	官報8/17 勅令 東京市区改正条例※ 官報8/17 閣令 東京市区改正委員会組織権限 明治二十年度鉄道局年報 伊藤虎太註釈 東京市区改正条例註釈 竹内洗編 東京市区改正条例略議 藤田次明編 東京市区改正条例俗解 附明細地図 高橋琢也 森林紀要 山県有朋 デ・レーケ履歴書(叙勲上申書に添付) 東京経済雑誌426 築港論の流行 東京経済雑誌440 東京市区改正委員会 国民之友29 百年後の大計 国民之友32 市区改正委員長の演説 読売新聞6/10 横浜築港設計の詳細 東京朝日新聞8/16 市区改正実施 東京朝日新聞8/21 土地家屋売買譲渡規則 東京朝日新聞8/26 家屋建築規則	市区改正ノ設計ヲ議定 設計ニ違フモノアレハ其改正ヲ要求シ 其架橋ハ実ニ特殊ノ設計ヲ要スルモノトス 設計即チ方法 市区改正ノ設計及事業ノ方法等ヲ議定 設計已に確定シ工事已に整頓するに及んで之を喋々するは遅し 旧復造林ヲ設計シ 福岡県築港費減省ノ設計 設計測量既に成りて鉄道布設に着手ノ築港の方案設計及測量等 全部普及の設計ノ十分の設計を要すノ一定の設計を公示し 其眼目たる設計は〜位の事に過ぎずと云へり 其費途を定めて一定の設計を公示シノ本案改良の設計を為せる 今其設計(せっけい)の模様を聞くに【読み初出】 氏の設計に係る図面 鉄道は一等道路に布設せしめざる設計なり 家屋建築法を厳重に改正設計に基き種々の制限を立て
1889(明治22)	官報1/14 丁抹 新運河開鑿工事設計方案 官報2/6 西伯利鉄道敷設工事ノ設計 北海道庁長官 北海道炭鉄鉄道会社創設ノ儀上請 二見鏡三郎編 土木工学 鉄道編 東京経済雑誌465 神戸港水道布設の計画 東京経済雑誌474 先づ日本鉄道の全案を立つべし 藤沢利喜太郎編 数学ニ用ナル辞ノ英和対訳字書※	同国々会ニ於テハ新運河開鑿工事ノ設計方案ノ審議中ナリ 布設ニ関スル設計ヲ論センニ 之ヲ該社ニ移サハ其設計モ亦容易ニシテ着々起スルコトヲ得ラル 新ニ鉄道ヲ設計スルニ方リテハノ車輛ヲ設計セント欲セハ 英人バアマア氏を聘して設計を為さめたりしが 日本全体の鉄道設計を以て階梯様と為す design 設計
1890(明治23)	官報2/8 広東省城電気灯ノ設計 官報4/5 西伯利鉄道工事設計委員ノ決議 官報7/10 虎列剌予防取締設計 官報10/14 運河開鑿設計案呈出 デ・レーケ 宮原直亮訳 淀川並大和川検査報告書 山県有朋 碓氷峠開鑿による鉄道敷設決定通知書 多田房之輔 新撰実用学校管理法 西国パルスローズ府万国博覧会報告書 工学会誌97 高塔設計ノ懸賞 日本蚕業雑誌28 漫評子「製糸真実」の評	(記事本文には「設計」なし) (記事本文には「設計」なし) 虎列剌倍々伝播ノ兆アルニ依リ十分取締ヲ為スコトニ設計セリ 巴里ヨリ海ニ達スル運河ノ開鑿スルノ設計案 我カ立テタル工事設計ノ可成る改良ノ目的ヲ以テ設計ヲナス 該工事設計書並ニ預算書ヲ至急差出スヘシ 敷地ノ設計ノ校舎ノ設計ノ地方固有ノ必要ニ原ツクベシ 地中海沿岸諸港ニ於テ我貿易ヲ起スノ必要及其設計 高塔ノ高サ千二百尺ノモノヲ設計シタルモノニハ 製糸所起工の設計を為すもの日に月に多きを加ふ
1891(明治24)	官報1/24 伯林ヲ海港ト為ス工事ノ設計 官報2/4 ポスボラス海峡ノ架橋設計 官報8/29 艦船運搬鉄道設計案 官報11/5 物産共進会設計委員 官報11/20 大鉄道敷設ノ設計 官報12/25 フェオードーシヤ商港築造ノ設計 文部大臣官房会計課 小学校建築図案 西師意 治水論 井上清太郎 砂防工大意 佐分利一嗣 日本之鉄道 南部常次郎 衛生工事新論 国民之友133 河島静 鉄道論	技師シエンクノ同工事設計ヲ聞クニ (記事本文には「設計」なし) 艦船ヲ運搬スルタメノ鉄道設計案ヲ審議セシムルタメ 北海道物産共進会設計委員ヲ命ゼリ (記事本文には「設計」なし) 商港ヲ築造スルタメ工部省ニ於テテ調製セル設計案 土地ノ状況ニ応シテ相当ノ設計ヲ為スノ設計宜キニ適スルモノ 設計企画の目算的、推測的ならすして算数的、幾何的なるべきこと 実地景状如何ニヨリ取捨斟酌シ設計ヲセバ 第二期鉄道設計上ノ注意 排水事業設計ニ必要ナル事件 鉄道ノ設計ニ於テハ然ラスノ拡張ノ設計ヲ立テ
1892(明治25)	官報12/5 鴨川新水路工事設計要領 官報12/21 瑞西湖水引用ノ設計 官報12/28 モンブラン山巔觀象台設計案 横浜税関 独逸關稅法 伴直之助 東京市水道改良意見 和田伝太郎他 中央線ノ御殿場線ニ関スル意見書 ジェー・エッチ・ガビンス 漢語英訳辞典	多少前設計ヲ補修シノ其工事設計ノ大要ハ左ノ如シ 一 大水道工事設計案ヲ調製セリノ此設計ニ拠レハ 觀象台ヲ建設スルタメ天文学者ジョーゼンノ主張シタル設計案 關稅監督及徴稅上ノ設計 東京市水道改良ノ設計ノ工事ノ設計ニ至リテハ 工事上ノ設計ノ數ヶ所ニ「スキッチハックス」ヲ設計シ Sekkei 設計, suru, to devise a scheme; concoct a plan
1893(明治26)	官報1/11 西伯利大鉄道設計案議定 官報7/10 ポスボラス海峡架橋工事ノ設計 官報7/29 彼得堡新商港開鑿工事ノ設計 官報9/30 西伯利水路工事設計 官報11/15 水害復旧工事設計工費調査 デ・レーケ 宮原直亮訳 大阪築港水堤構造設計書 デ・レーケ 宮原直亮訳 海底土質ニ関スル上申書 小里頼永編 中仙道鉄道敷設理由書 陸軍省 工兵操典3 軍路 川越鉄道会社の計画変更に関する請願書	西伯利大鉄道設計案ノ評議會ヲ開キ 最近ノ設計ニテハノ架橋ニ必要ナル準備工事ノ設計中ナリ 工部省ニ於テ按定シタル該開鑿工事ノ設計ニ拠レハ 西伯利水路ノ改修ニ関スル設計 水害復旧工事設計工費調査ノタメ 此設計ニハーツモ粗笨工ヲ用ヒスノ水堤構造方ノ設計 我予想ニ成レシ設計ハ悉ク廢棄セサルヲ得ス 篠ノ井線ヲ敷設セズンバ中央線設計ノ目的ヲ達シ得ザル事 準線ノ擬定及設計図ノ調製 前設計變更出願スルモ御開届ケ無之様此段奉請願候也
1894(明治27)	官報6/12 ボルドー、ナルボンヌ間運河開鑿ノ設計 デ・レーケ 宮原直亮訳 大阪築港計画書 安田邦治編 第四議會自由党運動史 立川知方編 洋館建築設計書々式 河村樹・毛呂政太郎編 道路橋梁設計便覧 建築雑誌87 平安宮建築設計並ニ工費 建築雑誌89 曾根達藏 万国建築會議実況報告 中外医事新報334 欽泉場改良に関する審査設計 自由党党報60 横浜築港の不始末 野村竜太郎・下山秀久編 工学字彙 第3版	技師ケルウキリェーハ熱心ニ本議ヲ主張シ、其設計案ニ拠レハ 水路ノ幅ヲ寛裕ニ設計シタリノ熟慮詳査シテノ設計ヲ立ツソヘシ 政府ノ設計ニ拠レハノ軍艦製造ノ設計 設計法ニ至リテハ規矩一定セズ 土木工事設計規定ノ工事設計書ハ再三精算ヲナシ (記事本文には「設計」なし) 此人ハ沢山博覧会の建物を設計しました 欽泉場改良に関する審査設計の事務を取扱ふ 将来幾百年の意地が果して此設計に因て出来得べきか design 計画, 設計, 意匠

(B) 中国語

	資料名	出現文脈
3世紀	[杜預 論水利疏]	告長吏二千石為之設計而不廓開大制定其趨舍之宜恐徒文具]
	[陳寿 三国志 魏志4 高貴鄉公髦伝]	便因為弑逆路遺吾左右人令因吾服藥密行酖毒重相設計]
1667(康熙6)	[孫奇逢 理学宗伝10]	直將当下胸中粘帶設計斷除, 眼前紛紜設計平妥, 原來性命設計恢復]
1752(乾隆17)	[馮夢竜 繡像東周列国全志15]	無極之欲殺子胥不為不急, 其設計以阻其路不為不嚴, 却偏有一東皋公設計救他, 又偏有一皇甫訥与他相像]
1790(乾隆55)	[趙翼 陔余叢考5]	是起兵始於齊哀王, 沢為所欺始設計入長安也]
18世紀	[Basset訳 使徒行伝23(モリソン使用写本により確認)]	得知伊等設計]
1816(嘉慶21)	[Milne 幼学浅解問答]	神父者可憐我世間人, 而設救我靈之計]
1822(道光2)	[Morrison 英華字典※]	to design, scheme, or plan 設計策] (=設+計策)
1826(道光6)	[Collie 天鏡明鑑]	神天因可憐世人至極, 故而設救之之計/神天設救世人之計]
1830(道光10)	[朱方增 從政觀法録4]	論日黃芳度設計全城能繼父志即令承襲公爵]
1832(道光12)	[Morrison 古聖奉神天啓示道家訓※]	天地人物彼此投機相合, 豈可少一個原設計造化者乎/夫千里鏡可喻得人之眼睛, 其鏡顯然是故意設計所致, 其眼亦明然一位原設計制造之者也]
上と同時期?	[Morrison? 道之本原全体要論]	再者有智有能者可設計而元創造一人兼靈心身体者是乃無限無量至極之智之能者]
1847(道光27)	[Medhurst English and Chinese Dictionary 1※]	to design, to plan 計謀, 希図, 画策, 設計/to ensnare 設計害人, 誘入圈套, 籠絡人家, 絆套]
1867(同治6)	[Lobscheid 英華字典2※]	contrive, to contrive a plan 設計/design, to plan 設計, 立計謀, 図謀, 画策, 籌策/plan, to devise a plan 設計/plot, to plan 謀, 設計, 設謀, 図謀, 作計, 構/他]
1871(同治10)	[Stent 漢英合璧相連字彙]	設計 to contrive, to plan]
1875(光緒1)	[鄺其照 字典集成 第2版]	to project 計謀, 發出, 設計/他]
1885(光緒11)	申報4/11 京報全録 金順片]	查伊犁軍台卡倫均經從新復設計【初出?】]
1895(光緒21)	[申報3/30 論用兵之事前面有攔阻軍行之物(統)]	用攻法之將設計移兵以過河]
1896(光緒22)	[時務報7 武官論砲彈※]	水師提督孤拔乃設計用砲向上使砲彈落入中国堅木船中]
1897(光緒23)	実学報9 石狩川疏濬工事<日> [実学報12 德國之新兵器<日>]	全川之改固雖費用為充分浩大要可設計籌画【初出】 設此計者為苦路之普(クルップ)氏已向德帝說明用法]
1899(光緒25)	農学报58 製茶輸出西比利亞之設計<日> 清議報21 詳論秦皇島形勢※]	(記事本文には「設計」なし) 清政府欲開埠于秦皇島, 既備派天津英租界工部局技師四名令代測量設計/予試就之間其設計如何]
	1901(光緒27)	清議報78 朝鮮海防之設計]
1902(光緒28)	申報8/18 俄營蒙地<日> 申報8/21 論俄營蒙地事<日>※]	俄人近派警備武員要結蒙古王公設計安設鐵道 今果派警備武員要結蒙古王公設計分設鐵道]
1903(光緒29)	項文瑞 遊日本学校筆記<日>※ 関庚麟 日本学校図論<日>※]	建築設計通書, 編者為朝倉清一 工業分析実習, 工場設計製図]
1905(光緒31)	農学报293 水稻模範試作設計<日>]	(記事本文には「設計」なし)
1907(光緒33)	申報6/4 東京通信 中国国民衛生会叙文<日> 申報9/18 東京通函 參觀文部省<日> 吉林官報17 日本大博覧會設計之要領<日>]	公衆衛生之設計尚漠然寂然者此同人所日夜焦憂也 建築課分設計係處務係 (本文未確認)
	1908(光緒34)	東方雜誌5-11 日本人之撫順談<日>]
1909(宣統1)	申報2/7 蘇撫奏陳開弁習芸所情形 申報4/7 論南洋勸業会与実業界前途之關係 申報7/31 商弁杭垣自來水有限公司招股簡章]	其余各府直隸州府果亦多次第籌設計已竣工 各自為謀, 不相比較, 毫無求進改良之設計者 俟工程師測量後再行製成預算表及設計書]
	1910(宣統2)	申報7/9 日本之秘密飛行船<日> 申報10/28 初等小学教育必須改良之緣起 申報12/25 学部答覆議員質問教育說帖(二) 東方雜誌7-4 東南鐵道大計画 成都商報7.8 日本台湾糖業調査報告及設計書<日>]
1911(宣統3)		申報1/3 編設各路扒船之計画 申報2/14 資政院議員羅傑治水建議案 申報12/31 改革全国塩法意見書 世界月報3-3 理想房屋 金城4-8 甘肅設計委員會稅收政策意見書 國際播音(号数不明) 安全飛機的奇形設計]

1912(民国1)	申報1/1 改革全国塩法意見書(続) 申報11/6 伯達(バグダッド)鉄道之歴史 東方雜誌9-8 塩政改革計畫書 東方雜誌9-8 津浦鉄道之黄河大鉄橋<日> 鉄道1-3 軌条枕木路基設計之原理	製塩設計之大要／運塩設計之大要／銷塩設計之大要 支線布設其設計期為九個月布設期為其次之二個年 民製設計／官收設計／收塩設計／商運設計／設計之次第 由設計之基礎計算，五噸之貨車用四台之機關車牽引亦極穩固 枕木之設計其長短當從適當之限度
1913(民国2)	申報7/11 建築講習所招生 申報11/7 五路經營中之日人觀<日> 申報12/5 海蘭鐵路準備開弁之内容 申報12/6 四部會定実業借款条例 鐵路協會会報10 武漢跨江大橋之設計	卒業後得任各地方機關建築技師及監工員設計製図員等職務 工事之設計採該鐵路均為南滿鐵路支線之主義 海蘭鐵路借款合同既經正式簽字比利時之技師已為設計準備 所借之債額以符合該設計所需用之額為準 (記事本文には「設計」なし)
1914(民国3)	申報1/8 場産整理処調査条例 申報2/21 交通部庁局之新職制 申報7/24 鈦務監督署諄勸華僑投資弁鈦文 東方雜誌11-1 飛行学要義 中華工程師学会会報1-6 紋昇起重機設計 鐵路協會会報3-7 設計及製図 塩政雜誌15 浙江模範塩業試験場製造設計表	除填註各種設計表外，更須編成完密之計畫書 路工設計及其改良事項／車輛設計及其保存整理事項 鈦地之測量鈦質之化驗工程之設計保安之講求既存在有關學理 旋翼式飛行機 考察鳥翼之旋転運動而設計者也 今欲設計起0.8噸之複式裝置小紋升起重機一座其算法应当如何 凡欲設計一種器械先製大概之一般図形 倣日本台取法採浦設計表／真塩設計表
1915(民国4)	申報6/24 鐵道院改正官制<日> 申報12/16 福建勸業会規章 中華工程師学会会報2-3,2-4 煙窓設計及其構造	將管理局分為五科本院總核計画設計及監督 關於工程設計事項 (記事本文には「設計」なし)
1916(民国5)	申報10/29 交通部訂定各路管理局編制專章 申報11/20 機械工師袖珍(書籍廣告) 中華工程師学会會報3-11 株鈦鐵路工局編制專章 鐵路協會会報5-3 工事設計計算之概<日> 婦女雜誌2-6,2-7 住居之選択及其建築設計法<日>	工程課掌設計製図施工及材料事項 本書内容工学計算実用表二百余种，各附用法及機械設計法 工程課掌設計製図施工材料及鉄路用地事項 關於水力土木工事之日常設計及計算上之專門書則尚鈔善本 住宅建築之設計第一須定建築之方位住宅位置
1917(民国6)	申報4/13 浙江陸軍包攬工程投標廣告 申報5/24 紹慈溪之保黎医院 申報8/25 真野工程所(工務店の廣告)<日> 東方雜誌14-6 最近之高速武裝飛行機 電界7 設計電機所用曲線之解釈 寸心5 北京電車設計書 同德1,2 全国無線電信獨立設計大方鍼 礦業雜誌1-2 十萬元之冶鋅設計 實業雜誌18 鉄筋混凝土之設計(続) 嘉定県公報26 太倉農事試験場冬作設計図	工程設計図樣做品材料尺寸規条及契約書案 建築之設計多運用科学知識 設計包工 第十一図為其全形乃卡起史氏以非常高速之設計而製成者 設計電機時所用数学公式率皆近似之值 本設計所采之方式及價值純以日美兩國為標準 茲本設計大方鍼分条列論於次 左為本設計預算細目 (記事本文には「設計」なし) (図中には「設計」なし)
1918(民国7)	申報3/3 農商部訂定海漁業技術伝習所伝習規程 申報12/29 日本開門海底鉄道<日> 東方雜誌14-12 浙江振興農業之計畫 東方雜誌15-5 電氣事業取締条例 中華工程師学会會報5-1 鉄筋混合土水塔之設計 中華工程師学会會報5-6 鉄路橋梁設計規定標準議 中華工程師学会會報5-9 屋宇建築模範図解 工業同志進行会雜誌2 建築鉄骨工場設計大要 電氣協會雜誌20 全国無線電信獨立設計大方鍼 教育与職業7 中華職業学校校舍設計図	如關於技術有疑義者得隨時至船所詢問並得請托本所代理設計等 設計開鑿隧道於海底三竹丈之下 每學生分地若干或材料若干，使其自為設計及經營製造 但有特別設計得交通部之許可者不在此限 試先將此設計中所用此各常数記之如次／通風窓之設計 凡作橋梁設計首宜知悉者為該橋能任受之載重 建築學者必須窮研式樣之沿革變遷方可從事設計 今將其設計大略述之如左 拠日本通信技師佐伯無線電信設計 (図中には「設計」なし)
1919(民国8)	申報1/27 英国之凱裕植物園内幕情况<日> 申報2/26 統一鉄路問題之新潮流 申報3/7 國際共同發展中国実業計畫書 東方雜誌15-12 現代文明与都市計画<日> 東方雜誌16-1 大工業組織与新徒弟制度<日> 電氣協會雜誌24 火車之電灯設計 電氣協會雜誌25 電機設計之根本方式 磁業雜誌3-1,3-2 雲南箇旧錫鈦工廠給水事宜調查設計 實業雜誌25 日本米田及千徳鈦山之探鈦与設計<日> 教育与職業15 集美学校鉄工木工場設計	俄人植物園設計專家歷波斯開氏 就以鉄路論，人才被其遏抑，材料被其壟斷，工程設計莫由參預 令其設計有統系，用物有準度，以免浪費，以便作工 都市設計新運動之基礎於之乎備 機械設計／教授機械製図以大機器作業上必要用具之設計為主 車軸發電機式設計極為完備 此実設計者所奉為根本公式也 吾人不得不先將設計法分為二種而考究之 以下就兩鈦山之探鈦成績而着手兩山採鈦精鍊設計 工場主任，設計員，工場書記，職工長，職工

凡例・注

- この年表は19世紀終盤までの日本語および20世紀初期までの中国語における一語化した「設計」の出現状況を示す。それ以外の関連するものも〔 〕に入れて少数示す。「設計」の一語化の判定に関わる不明確な要素については本文で述べる。
- 資料名は記入スペースの制約上必要に応じて調整して示す。出現文脈は可能な限り資料の通りに示すが、一部にスペースの制約上調整して示すものもある。
- 中国語の資料のうち、日本との関わりが深いものについては資料名の後ろに「<日>」と付記する。
- 資料名の後ろに付した「※」は当該の用例が過去の研究ですでに指摘されていることを示す。
- 漢字表記に振り仮名などの形で添えられた読みや補足説明は()に入れて小字で示す。
- 用例は原則として現物ないしその画像、影印によって確認したが、それができないものは翻字テキストによった。翻字者によって加えられた読みは採用しない。

Grammatical Peculiarities of Sino-Japanese Words and Their Influence on Chinese:
General Discussion and a Case Study of *Sekkei/Sheji*

Tadaharu TANOMURA

Historically, the Japanese have coined a countless number of Sino-Chinese compound words either by lexicalizing Chinese phrasal expressions or by combining Sino-Chinese morphemes after the same fashion.

Compound words thus created often possess grammatical properties that may be regarded as peculiar when traditional Chinese is taken as the standard of judgment. For example, the noun *dokusyo*, denoting book-reading, is a result of lexicalization of the Chinese verb phrase *du shu*, 'to read book(s)', to use the pronunciation and roman orthography of the present standard language. The compound verb *dokusyo-suru*, 'to read books' (more literally, 'to do book-reading') should originally have been intransitive, but now it may also be employed as a transitive verb to form a phrase such as *suki na hon o dokusyo-suru*, 'to read books one likes' (more literally, 'to book-read books one likes').

In the beginning part of this article, it will be argued, among other things, that there are distinguishable types of such semantic and syntactic expansion of compound verbs of the VN-*suru* form, where VN is a Sino-Japanese compound noun of the verb-noun type like *dokusyo*, and that those changes in Japanese exerted an influence on the lexicon and grammar of Chinese in the period starting from the end of the nineteenth century.

In the remaining part of the article, the lexical history of the noun *sekkei*, which denotes 'planning' or 'designing objects to be created', will be explored. *Sekkei* is a result of lexicalization of the Chinese verb phrase *she ji*, denoting 'to make a plan' or 'to plot a conspiracy', but acquired a new meaning, thereby losing analyticity and transparency, in the mid-nineteenth century Japan. It will be argued that *sekkei* is another instance of semantic and syntactic expansion mentioned above, although the fact may be obscured by the semantic change it underwent, and that its new usage was borrowed into Chinese as a single word of *sheji*, which may function as a noun and a transitive verb, largely replacing the traditional usage as a verb phrase.

Keywords: Sino-Japanese compound words, linguistic interaction between Japanese and Chinese, grammatical loan, *sekkei*, *sheji*